

郎路生麻・軒主

大正十三年三月三日 第三種郵便物認可
昭和九年十二月一日發行 每月一回（日發行）

川柳雜誌

川柳雜誌社發行

川柳雜誌

第七卷 第二十號
拾二月號



京阪神 川柳會
支部聯合

吉例に據り川柳雜誌社後援の下に京阪神支部聯合句會を開催することになりました。句會は川柳作家が一堂に會すると云ふ歡びばかりではなく、創作向上に對するより刺激を相互の胸に感受し得る歡びの源泉でもあります。川柳家諸氏は擧つて御出席下さい。同時に川柳の道一步を踏み出さうと思はれる方々の御出席をも、歡迎の念を以てお待ち致します。

日時 十二月七日(日曜)
(午後六時半)

會場 日本橋俱樂部
大阪市電日本橋一丁目
交又點北ノ辻東入南側

兼題

「麗人」三句 路郎 先生選
「問屋」三句 萬よし 先生選

講演 「川柳の線」
麻生 路郎

會費 金參拾錢

出席者全部に投句用箋
(百枚綴)一冊進呈

○兼題及席題各三光に呈賞(但出席者に限る)副賞品多數あり
主 大阪市南區疊屋町周防町
東入 永田里十九方
支部聯合川柳會事務所

後援 川柳雜誌社

川柳雜誌 第七卷第十二號 目次

文苑

幻を織る理智
机上庭園雜草
町二君のプロフ井ル
唐柳短解
月卓を圍んで

かまきり
街に住めば(四)
モダン徒然草
時勢の姿
肥へる
復活
時勢は移る
サラリーマンロード
氣毒な病人の話

BUILDING

一路集(募集句)

鐵齒
奧齒
失策

本社十一月例會
支部柳壇聲
各地柳壇
續川柳家戶籍調
杭全町MEMO
不朽洞から

創作

松丘町二	綿谷摩耶火	安西杏三	蛭子省二	路郎紋太	ひろし雨樓	琴人町二	阿部閑生	高橋かほる	尾崎海洋人	橋豆佛	水谷鮎美	關本雅幽	越中今雨	楊井二南	中野裸人	森東魚選	中野柳陽選	水谷鮎美選	阿部閑生共選	福田山雨樓記	福田山雨樓	橋本綠生	路郎生
川柳塔	松丘町二	伊藤綠助	福井山雨樓	酒井多助	竹内多助	伊藤愚陀	橋本綠雨	中野柳陽	須崎豆柳	木村卓秋	山中裸人	水田凡々	熊田光總	河西艸蛾	櫻井車樂	櫻井角	平井倉太	安西杏三	前田五健	大島壽明	武子吟女	房勝女	柳樽
關本雅幽	水谷鮎美	庄島萬子	中島鐵	朝田新	松盛	丸山今峰	越中今峰	池田觀	川村春	喜多野華	日野櫻	藤岡明	西村計	上野錦	中澤濁	河見閑	富士野鞍馬	長崎柳秀	諸誼女壽枝女	近作柳樽	光耀抄	房勝女	柳樽



近作柳樽

路郎

選

引京處藤秋音秋存毒土人金金欠商子時
 力は女椅ものの在々のの庫の伸賣供計
 をの子よのし道のをし今事子の等あり
 無ごのし蜻の區い主にて初の中下
 視さこラン來ぬ後にし金の切酒膝ふ髭め何
 して吉くムンブ行をしにるのへ言死ふの厚
 壁勇も閑婦の店をたはのの取葉ん威司分
 のの秋婦の房の待はののののののの
 蜘蛛酒の女編の待れすの冬もがふは
 はのの女編の待れすの冬もがふは
 這の女編の待れすの冬もがふは
 ひ歌なみれちるる突性峻知らのへも

同同同同神同同同同同朝同同同同同同同神

戸鮮戸

同同同同浪同同同同同如同同同同同同同素

人街空生



都腰卷ミやらを出して長閑さよ
 叱られる覺悟を見抜く親ごゝろ
 大衆の力署長をうなづかせ
 祖母さんも實は待つてたオヤツで
 ギヤマンミ葡萄のつやミ處女の指
 月が澄むサロメミ戀がして見たし
 資本家にまだ同情を持つ女工
 もう少し話して歸れ秋の夜
 ぎの草の花かミ蔓を手繰り見る
 朝虹の橋から間引菜賣りの指白し
 十五夜へ指す看護婦の指白し
 筒抜けた聲で日稼ぎ戻るなり
 病みほけうけ掛圖のミ云はすなり
 標札は檜生活樂でなれし
 丸帶の話をベビはほつミか
 ウエープしていきまづい顔で來る
 死ぬる氣へ意見は要らぬお世話なり
 死賃が三つ四つたまり小さう居る
 家賃が柄着せても似合ふ娘の自慢
 戀をす柄や父の年忌はさうに過ぎ
 息が荒くなつたぞ出來たらし
 足並を母に誇りでもなし二十七
 處女が誇りでもなし二十七

東京 同 同 同 大阪 同 同 同 金澤 同 同 同 大阪 同 同 同 松山 同 同 同 名古屋 同 同 大阪

摩耶火 同 同 同 山花 同 同 同 木人 同 同 同 靈壺 同 同 同 玄々子 同 同 同 草石 同 同 芳樹



智惠熱心人は手輕に言ふけれど
うつろなるこゝろ蘇鐵のグロテスク
秋風のなかに蜘蛛の巢に蜘蛛のゐる
失業へ柘榴まつかな口をあけ
あつさりご断られたりあの構へ
人情は街の煙で消え失せて
それはおれがきでたの太鼓なり
寝顔なごゑがきて我のあさましき

阪急前にて

憂鬱が田中巡查に氣を變へる
生ませさき勝手になぬあほらし
血を亨けて遺産を受けぬあほらし
丸髭も傘でさばしりけり
メンストリート漸く越してふりかへり
五十錢たはけになつて儲けたり
兄弟にすぐなけな飲む菜ツぱ服
丁稚等を叱り飛ばして損する
新妻に甘へたいた氣で風邪をひき
食へる身のまたい其の上が支店長
くしやくしやの通帳にのこる二萬圓
靴音の自分なるの呆れたる
荒立てるこもひがんだ姿なる
不景氣をふつさばしうにジャズはなり

近江 大同 大阪 東京 大同 大阪

同 け し
た 竹
二 郎
桐
同
亂 子

神戶 大同 大阪 豊橋 大同 大阪 大同 大阪 東京 大同 大阪

同 村
可 さん
同 骨
枯 洋
同 二
志 三
同 四
舟 々
同 雀
の 子



戀人の胸で泣きたい事があり
 揉手にして弱き姿を見せてゐる
 金にすゑる氣の姿崩れ
 孫にまでそむかれながら金に生き
 小理屈を世間知らずが得意なり
 まだ拜む母の心に立ちつくし
 解けさうな帯でほかんご船頭の子
 人間を見競べられて勤まらず
 横向けの後ろ向きの孫一人
 たゞ赤いだけで着て居てくれる子
 乳母車寝た子に小石さへもよけ
 處女性がまだぬけきらぬ帯の位置
 たまに來る姑に氣儘見つけられ
 泣き出したいやうに芒に取りまかれ
 夕焼へもうこれきりのトロツコよ
 着ぶくれへ話しかければ咳になり
 初獵へ秘書犬にまで使はれる
 閑な公休若菜でも蒔こ
 交又點威猛高なるヘルメツト
 求職のさはさりながら今日のて
 月の川森の中なる灯も口喧嘩
 瘦せぎすと思へぬ程の喧嘩

同 金 澤 同 東 京 同 神 戸 同 大 阪 同 明 石 同 鳥 取 同 大 和 同 長 野 同 大 阪 同 石 川 同 秋 山

六

同 旭 吉 然 樂 念 民 二 兒 枝 々 草
 同 音 同 不 同 村 同 了 同 耕 同 勝 同 柳 同 桂 同 山 同 秋
 無



許婚あつたらなあゝ火をおこし
 天高し二銭の汁に苦力が寄る
 女さへ見ればピエロかなる心
 一枚の紙幣を買物つかへて務
 一寸した顔で持つる女事務
 幸福は無慾なこへ嫁にゆき
 階級を言葉使ひで見分ける
 すねて寝た話に女仰々し
 秋の日は暮れてすき焼なつかし
 神棚へ近う病む兒とおきてる
 叱つてもくれずお酒が出してあり
 横町に豆腐やがあり妾が居
 寝られぬに明日の言譯考へる
 ドン底に親子五人の箸の音
 組合つて握つた茶碗放すまい
 秋日和牝牛ぬくく孕んだよい
 顔見たらマスキくく施療院
 みくらべておかずを食べる年こなり
 要するに若いさ伯父もそつけなし
 失望の目にあゝりく水の色
 大阪で育ちましたのが辯をは下
 薬灰の煙り霜夜の戸を叩く手

同奉天 同菊路 同同 同丸葉 同空山 同愛媛 同神戶 同鳥取 同長野 同大阪 同平塚 同釜ヶ池 同神戸 同大坂 同石川 同愛媛 同大阪

同美坊 同登美 同同 同菊路 同同 同丸葉 同空山 同愛媛 同神戶 同鳥取 同長野 同大阪 同平塚 同釜ヶ池 同神戸 同大坂 同石川 同愛媛 同大阪
 海英溪沒鬼銀城童有桂青卜卯黑空同丸菊同登同
 洋賀食笑爲天
 人夫鶯子太花月史郎舟水居生子山葉路坊



人妻のまさかと思ふ美しさ
 ありがたや詣る心によくの
 あり高野山にて
 豊作で困り不作で困るの
 のさばつて小牛程ある犬を
 エロの町舞臺が廻る奥座敷
 女房の眞心を知る旅の空
 まじないのそれ程きけば恐ろし
 いさかうて生きる我身の淋し
 ごさく屍が引かれゆく
 不景氣よライスカレーの客ばかり
 箏笛の中過去の流
 うたがひを知らぬ笑顔に祖父は老
 開ける迄電報神に念じる
 川上に降雨があつた水の嵩
 清らかな心に歸り花を嗅ぎ
 ドライヴの前に馬力の意地悪さ
 初恋はよいが帳簿に違算あり
 見合ひなら話の中の茶の澁味
 面目がないう言ふのは口ばかり
 涼み臺田舎初段が來て居らぬ

不 明	高 知	吳 都	京 都	大 阪	鳥 取	大 阪	神 戸	大 阪	石 川	神 戸	釜 ヶ 池	大 阪	龍 田	大 阪	堺	吳 阪	大 阪	高 野 山	守 口
吼	も	六	良	憲	湖	吐	一	み	吉	三	愚	沐	翠	愚	籬	落	樹	於	あ
城	み	角	之	祐	坊	山	句	は	祥	霞	龍	天	峯	圖	下	葉	光	彦	ら



川柳時評 幻を織る理智

松丘町 二

川柳なる短詩が持ち得る内容は、事新しく云ふまでもなく實に複雑である。その複雑であり得るこいふ點が、換言すればその取材の天地が俳句なごの如く拮据でなく奔放自在であるこいふ點、もう一度云ひかへるなら僅か十七音字の詩型を以てしてあらゆる文學のニキスの表現をなし得るこいふ點が、川柳がユニークな最短詩と誇り得る所以であり、川柳作家が自己の個性をその個性に適應する方向へ自由にて育てゝゆける所以でもある。川柳は没個性詩である。いや没個性詩でなければならぬ、こいふ議論なき今日では既に一顧の價値すら持たないものである。

流石に水府氏はその近著『川柳手習』に於て、川柳も又個性を必要とし、作家はこの個性を活かさなければ駄でありますと述べてゐられる。そこでその活かさなければ駄である旨の作家の個性を最も完全に手軽に手輕に殺し得る方法は、得すこ云つて悪ければ擣めて一色に塗り潰す方法は作品の共選法である、こい

ふこころには氣がつかないらしい。尤も氏も我々ごの個性觀が違ふ、立脚點が違ふ云つて仕舞へばそれまでの話ではあるが。……こにかく普通俳壇でも歌壇でも共選は韻吟に限られ、發表の際には選者別にしてゐる。それが本當ではあるまいか。柳壇でも我々の共選はそれである。數人の選者に依つて投ぜられた點數の多いものゝみを抜いて發表する方法は、たゞそれと違つた傾向の選者を集めたライスカレー的共選であらうとも、殊にそれが難吟である場合、作家の個性を殺すのに絶好のもの、その素材の選擇に於て、その表現の手法に於て、特異な才能を持つ作家の特異な作品は遠慮なく捨てられて（たゞへ選者がA抜いてもBが採らないこいふ風に）鑄型から出た月並川柳のみが目押しに陳列されるために、自覺した作家は遂に川柳を見限るか、自由な眞の境地を求めて御免を蒙るこになり、これで上等だと思ふ者のみ面白さうなこを考へ、面白さうに云ひこなす術を習得して熟練工となるのである。

川柳の如き短詩型の文學は、それが短詩型であるだけに、一つの生命ある詩として仕上げることは難かしい。小説や戯曲はもとより長詩や或は短歌にしても、細部に少し位の缺點があつても、作品全體の價值に致命傷を與へることは殆どない云つてよいが、川柳は違ふ。川柳に在つては僅か一言字の如何で一句が珠玉なるか瓦礫なるかを決する場合さへ屢あるのだ而もその句が珠玉であるか瓦礫であるかといふことは、初者は勿論、相當の大家さ雖も自作への愛着に災せられて判斷を誤るこゝが多い川柳に權威ある選者が必要であるといふことは、こゝに一つの論據を見出すことになるのだ。これは獨り川柳に限らず、俳句にも又同様に云ひ得る事ではあるが、與し易いことを考へて、やゝもすれば言葉の上の機智や穿ちに上りして、藝術的價值の創造に苦しむ努力を惜みたる。川柳に於て殊に然りである。川柳作家は須らく自分の作品を愛し、自分の個性を尊重する意味からよき選者を選ばなければならぬ。滑稽、穿ち、輕味といつた川柳發祥以來の内容に新時代の磨きをかけて行く作家（滑稽といつても一九や邦の持つ程度のものだけが滑稽ではない龍ノ介や漱石の作品を見給へ。川柳に於ける滑稽の境地も又深く遠いものがあるではないか）人生の涙や感傷を潔癖を以て誦はうとする作家（感傷を捨てよ、とある人は云ふ。しかし感傷を全くなくした人生が可笑をなくした人生よりもいゝこ

誰が云ひ切れるか。少女小説だけが感傷ではない）詩といふ迷彩に依つて鋭い社會批評を試みやうとする作家、自分の生活を詩心に訴へる作家（こゝにいふ生活とは勿論物質的生存のみを意味しない）自然に關心を持つ作家（この境地が進むと、或は退く云つてもいい、新傾向俳句の境地と相容れて柳俳無差別論が實證されるかも知れない）新感覺に生きんとする作家又これらの作家にして十七音字又は十四音字の形式による表現に捉はれないで自由な自然なリズムで就はうと試みる作家（五七、五又は七・七等の音律以外の句は總て破調であるとし、甚しきは十七音字以外なら總て破調であるとしてゐる人があるが謬見である。蕎麥の花を見てるてさびしくなりぬ。鮎美。これは十七音字ではあるが、座が七音字である。それで少しのリズム的不自然さもない。又、算盤玉の如く並びたり兵隊の顔。町二。は二十二音字であり、空瓶の相衝突て寂し。だけは僅かに十三音字である。しかもこれらの調子は正調であり、甚だリズムカルであるではないか）……かうした數多き路を歩かうとする多數の有爲な作家、即ち自分の個性へ磨きをかけてゆかうとする作家の芽が、無自覺に或は間違つた自覺の下に、宗匠的選者の手によつて摘み取られてゆくことは恐ろしいことではないか。

我田に水を引くのではない。我が川柳雜誌の近作柳樽欄から

特異な好作家が絶えず生れつゝあることは心強い限りであるがそれらの人々については他日論ずるとして、暫く筆を川柳塔へ移さう。

かほる氏…若し路郎主幹の選句が自分の好みにのみ忠實たつたら、作家かほるは生れなかつたであらう。まだ未完成であり隙を残してはるが愚陀君の表現様式は恐らく現柳壇獨歩のものであらう。玉石混交の雨町君。然しながら川柳創作に年則を入れて大成したと稱する人達のイミテーションより、明日を約束してゐる威大なる瓦礫を私は樂しむものである。綠雨氏は黙々として自己の境地を開拓してゐる。そしてその表現は淡々として流れるやうな姿ながら、そこに漂ふ無限の陰翳を掴むには又無限の感受性を要求してゐる。嬉しい風格を備へた作家である。濁水氏の名もまた久しいものである。併し氏は最初に掴んだ川柳味をそのままに制作に苦しむことを忘れられたかの感がある。氏が色んな柳誌へ同じやうな作品を倦まず發表してゐられるから云ふのではない。その境地に於て敘太氏一脈通ずるものがあり乍ら、後者が絶えず制作に苦悶してゐられるのに對比しての言葉である。

さて私が最後に川柳吟が生んだユニークな作家として詮表したいと思ふのは、桑原京郎君である。抽象的な言葉であけつうよりもまづその近作を舉げてみよう。

おゝ寒月！これこそプロの姿なり
取り入れのうまさ鼻についできた 京 郎

しみたれな男に柳散りかゝり
生真面目なのもうるさがられる 同
世の中よりやんちゃをかし薪木割る 同
花嫁さなつてほんきに泣きにきた 同
丸髷に結へてふゝんさ笑ひたり 同

こゝにみる京郎君にはみじんの感傷もない。透徹したリアリストだ。丸髷の如き普通ならその嬉しさを云はうとする。そして精々「嬉しく字の稽古」ミでもして落付くのが既成月並作家の常套手法だが、作者はふゝんさ笑はしてゐる。自嘲かてれ隠しか、複雑な笑である。そして京郎君の観た散りかゝる柳は待呆けの女にあらずして「しみたれな男」であるのだ。作者の理智はかくしてあらゆる。幻を蹂躪しやうとする。そして現實へミ肉薄してゆく。肉薄して現實を解析し、解析した末は、理智は現實に關するあらゆる契點を見失ふだらう。こゝに理智は「厭世にも價しない人生」を眺めて己れの幻を綴り始めて、理智が一つの情熱になつてその歌を歌ひ始めるのはこの時だ。

雪よ降れ 逢へた今夜だ 京 郎
酒の味女のにほひイエスさま 同
盛り上る麥酒の泡がユートピア 同

理智もまた詩の分野を占めるのだ。こゝにいふ理智ミは現實の影像を知る理智のこゝだ。論理的記號の表現することが出来ないやうな精妙な理論を表現し得る理智のこゝだ。難かしい云ひ廻しをやめて云ひ直せば、詩人の、そして詩人のみの待ち得る理智のこゝだ。時に機智なり、嗤（以下三五頁へ續く）



月 評
卓を圍んで (前號)

路郎 紋太 ひろし

琴人 町二 山雨樓

近作柳樽琴人提出

やつぱりあやまらう妻も

子もあり

英 三

琴人——夫婦喧嘩の句があつて、その次に此の句が出てゐるので一層深刻な人生句だと思はれました。僕の今までの生活にびつたりとあふ様な氣持もさせられるので、この句を提出する。

ひろし——「あやまらう」といふのは勤先の主人とか上役にかいふやうな意味ではないのですか。

琴人——勿論さうした意味合のものに感じられる。要するに生活のためには、といふ人間の弱さ、そのために自分の強い氣持になり得ないといふ様な境地を詠つたものと思ふ。ひろし——「朝の陽へ」元の夫婦となりけり、この句はやはりさうして生きてゆく上の

不平や不満から出た夫婦喧嘩であつた譯ですな。

琴人——前の句の説明になるけれども、多少その間に葛藤があつたと見ることも出来得やうと思ひます。又さうであつてこの「朝の日へ」の句は生きると思ふ。

紋太——ストライキなどで妻や子のあるために弱氣になる職工などの句はよく見かけますが、テーマは同じであるかも知れないが「やつぱりあやまらう」といふ言葉のやはらか味から受ける感してこの句が獨立するものを持つてゐると思ふ。「あやまらう」と云ふのは自分の両親か、或ひは本店の主人とかを思はせて、爭議など、は異つた感じに受取れる。

路郎——さう云ふ様にとれるのは、さふ云ふ點からとれるのかと云へば調子の弱さと調子から来る或る親しみが、滲み出てゐるのに

因るのであらう。若しそれが爭議などの場合であれば同じあやまるにしても、少しある強さと憤りしきとが出なければならぬ。そしてこの句は十五音字であるけれども七七のリズムをなしてゐる。

ひろし——「氣の弱い、善良な其夫が思はれる下七の「妻も子もあり」「妻も子もある」をした方が、よりさうした氣持が出はせぬか。琴人——「ある」と強く出るより「あり」と詠嘆的にだした方がよい様に思ふ。

路郎——この場合は「あり」の方がいい。

紋太——全体に云へば弱々しい人が、弱々しい氣持を出してゐるから、これでもいい様なもの、何んさなく力の乏しい感があつて佳句と云ふ味は少ないに思はれる。

琴人——弱々しいさ云ふ、先入主に囚はれると紋太氏のお説の様に思はれるが、私としては素直な人の氣持さ思うので、非常に共鳴することになる。

町二——「朝の陽へ」の句は、古句の「仲直りもさの女房の聲になり」と同じ表現場合を詠んだものですが、それよりも更に表現に於て詩として優れたものになつてゐる。提出句は前句より新しい手法のものだが、技巧の點で及ばぬものがある様に思ふ。

路郎——「妻も子もあり」さ云ふ表現の仕方がやつぱりあやまらう」と云ふ様な突如として出て来たものに對して弱いのが、此の句の缺點だと云へば云へる。さしずめ好い言葉も見つからぬが「やつぱりあやまらう」妻の顔にぶつつかり」と云つた様に、少し妻や

子を作者の頭の中にはつきりさせればよくはないかと思ふ。

琴人「それはほんとうにいゝお説だ。

路郎 提出

妻の起きた後の枕を抱いてみた

摩耶火

路郎「エロティックな句である事と、口語調の句であることが、此句をこゝに引き出した遠因であらう。想としてはそんなに新しいものでないかもしれぬ。尤も川柳にこゝう云つた句がざらにあると言ふ譯ではないが、花袋の小説に「蒲團」と云ふのがある。この「蒲團」は自然主義時代の作品として、随分問題なつたものであり、モデル問題から云つても随分喧しく云はれたものであるが、それとこの句は同巧異曲の感がある。

紋太「僕は僞善かしらぬが、この句から受ける感じの様な句はあまり歓迎したくない。しかしさう云ふ後からやつぱり鼻の邊がむす／＼として、にんまり笑はせられるものを感じる。そしてこの下五の「抱いてみた」をもう少し露骨でない、客観的な言葉にした方が句としてよくはならぬかと思ふ。蒲團を嗅いだり枕を抱いたりする事に怖れはせぬけど、それを露骨に餘韻、餘情のない表現をされる事を畏れる。

路郎「抱いてみた」と言ふ露骨な表現がいけないさ云ふお説であつた。そして客観的に詠んだ方がよからうさ云ふ事であつたが、私は寧ろ露骨に主観的に詠んだ方がかう云

ふ句が真に生きると思ふものである。客観的にこれを詠めば多くの場合嫌味に感じられるのを畏れる。尤もこの論は大体論であつて要は作者の態度如何に依ると思ふ。

紋太「下五を客観的と云つた事は一旦とり消しますが、私の飽き足りない點は終の「みた」にかゝる様に思ふ。抱いてみたを讀み下した時に「さうですか」と答へたい様な感を持たされる事が惜しまれると思ふ。そこを再考してほしい。

路郎「この「抱いてみた」は断定的の様に思はれるかもしれないが、それ程の強さはなくて、口語調としての餘情を含ませてあるやうに僕には受けとれる。

ひろし「僕には洋書の裸婦からうける様な嚴肅な美意識は喚起されぬ。又抱いてみたが矢張り戯作気分ではないかと思ふ。枕を抱きしめずれば幾分さうした露骨さが避けられるかとも思ふ。

紋太「いや、私は抱いてみん、或ひは抱いてみたぞにすれば私の氣持にあふ。

琴人「この月の近作柳橋の句の中に、この句は異彩を放つてゐる。この句は下手に作句すると末摘花式になる恐れがある様に思はれる。最前から「枕を抱いてみた」に就いて色々お説があつたが、作者も可なりこの點では頭を悩まして表現したのであらうと私には感じられる。それだけこの句から嫌味と云ふものをなはつきりと感じられす、私には共鳴が出来る。

町二「僕はこの句から新末摘花と云つた

句ひを感じる。裸体畫の感じではなく、或種のグエールをかむつてゐる句の様に思はれる。妻の枕を抱いてみると云つた行動は普通から云つてアブノーマルであらう。たゞ比較的嫌味がなく、一種の冒險的表現を試みた點にはこの句が今月のこの欄の一異彩だと言ふお説に同意したい。

紋太「末摘花と云ふ程の猥褻はないと思ふ。

ひろし「然し危険な試みだと思ふ。

町二「僕は末摘花を單に猥褻なるものと見てゐないのが新末摘花と云つたのは、單なる非難ではない。

紋太「危険は内容でなくつて表現にあるものと思ふ。

町二「同感ですれ。

琴人「かう云つた行き方の句を一般的にすゝめる事はどうかと思ふが、特殊の人がこゝした境地を研究してこの方面に一生懸命を開くと言ふのも好ましい事と思ふ。

ひろし「如何に新しいものと私でもこの方面だけはこらへて欲しいと思ふ。

紋太「研究するはおかしいですれ。或る年配の人には自然に感じる事であるから、それを赤裸々に出す自由を束縛しない方がいゝ。凡て自然にですれ。

琴人「私の研究と云つたのは表現に對しての言葉なのです。

路郎「この方面の句に就いては餘程しつかりした根柢を持つて出なければならぬ。要はその人の態度である。この作家のこの作

品は決してエロ氣分を描寫するのが目的ではない。そこを買つてあげなければならぬ。今迄述べたことが、この句を非常な佳句だとして推賞してゐる様に受取れたなら、それは割引して貰つていゝ。たゞちよつと考へると變態性慾者の如く見へるけれども、常人の持つ感覺の中にはかうしたものを意識的に、或は無意識的に持つてゐるので、その點をかくも露骨に描出した作者の手腕を敬服したのに過ぎない。

紋太 提出

朝顔を見るだけに起き又眠り

憲 坊

紋太「事述べた句ではあるが、悠々とした生活振を思はれるだけの暢んびりしたものを持つてゐる。下五の「又眠り」がこの句の興味を強めてゐる。ナンセンスな句として提出する。

ひろし「又眠り」が平凡と陳腐から救つたと云ふ譯すな。

町二「又眠り」はこの句のよきではあるが、時間的経過を多分に含んでゐるので、休の句の表現が悠長なものになつてゐると思ふ。

琴人「風託のない生活状態が覗れる。さうしたのんびりとした氣持に一度なつて見たいと思つてゐる自分にはこの句の生活状態が羨しく思はれる。

路郎「又眠り」の下五にこの句の生命がかゝつてゐる事はうかがはれるが、何處かに

常套的手段によつて下五をくつゝけたと云ふやうな句ひがないでもない。それと單調な生活振りを叙した句としてはうなづけるけれども詩的情緒が稀薄ださ云ふ非難も甘受しない譯にはゆくまい。

紋太「この句が作者自身の生活を詠んであるともとれるし、その作者が多少有閑階級的な感じにもうけとれるが、又失業なんかして閑の充分にある場合にもとれると思ふ。それから自分でなくて、他の有閑階級の生活を叙したともつても好い様な叙法である。兎に角、自分と云ふものを強く出してゐない句だと思ふ。それだけに讀んで壓しつけられる様な感じは持つてゐない點が、普通적であるとも云へる。

路郎「今説明された三様の區別が、この句を讀んで感じられると云ふ説には私も同感である。それだけ表現上何處かに缺點があるのだと思ふ。その缺點があるために私達に迫つて来る力が足りないのだ、もう少し突込んだ句を作られるやゝに作者に期待したい。

町二「見るだけ」の「だけ」とか「又眠り」の「又」とかは多くの場合表現の贅字になる感がある。この句が弱く、やゝのびた句に感じられるのは、それも一つの因をなしてゐよう。

川柳塔ひろし提出

大丈夫何んぼ呑んでも父だ

父だ

朝 陽

ひろし「好い父であり、何んぼ呑んでも酔

はない朝陽君らしい平和な家庭を思はず句である。「父だ父だ」「ちやんだちやんだ」と讀めば一層面白いと思ふ。

紋太「讀者に愉快な氣分を與へてくれる句だと思ふ。そのまゝに表現された句であらうから、かう云ふのはおかしいが、下の齣の「父だ父だ」と云ふ言葉の持つ巧妙さを何をおいても感ぜず居れない。今云ふその部分だけを褒めるのは、此の句を冒瀆する事かも知れないが、讀みかへしては矢張り其處の巧さが何とも云へないと思ふ。

琴人「酒に強い作者の面目が、躍如とし現はされてゐる。大丈夫だと云つて呑むだけは呑む、それでも父と云ふ事は少しも念頭を去つてゐない。此の句は父だ父だの下の齣で確により以上の生命を與へてゐると思ふ。

紋太「父だ」とだけではよくある想の様に思ふが「父だ父だ」と繰り返したので文句なしに巧いと思はれる。併し一面に此の巧いと思はせる點がもしかすると、此の句の缺點になりはしないでせうか、つまり眞實味がいくらか傷つけられる様に思はれないでせうか。

ひろし「自分は子の父であると思ふ自覺とお父さんは大丈夫だと云ふ二つの氣持が「父だ父だ」に依つて出でゐると思ふ。

紋太「眞實味さ云ふのは、不可なかつた。つまりひょうきんな心持、大酒家のおごけた心持から生れた句でせうね。

路郎「朝陽君の、あの明けつ放しな期らかな氣持が酒のために、更に魂の勇躍が陶酔と

までなるのであるが、而も子に對する限りなき愛が其處に飛出してゐる點、誠に嬉しい句である。「父だ父だ」が此の句をすかしたことは既に云はれた通りである。此の句は朝陽君近來の傑作として誇るに足るものであらう。私達の推賞おかないのはなくまざる妙味を感じさせられる點である。句法について云へば「何んば呑んでも」「は」「いくら呑んでも」とした方がリズムの點から云つて、すつきりとした響がくると思ふが、併し作者が關西人であるから、其の點は、あな勝、非難す可き程の大きな瑕ではない。

町二 萬葉の憶慕の様な父も頼もしいが此の句の父もいつそ頼もしいと思ふ。私は方言や俗語を使つた川柳は、あまり好まないが此の場合の「何んば」に就いては、先生のお説の通りに感じる。

路郎 創刊以來事件川柳の多くなを詠んでゐた朝陽君が、此處まで出て來てくれたことは僕としては涙の出る程嬉しい。同じ欄にある「田舎の祭黒朱子の酌」も巧い。此の調子で大いに力作を示して貰ひたい。(此時山雨樓氏出席)

町二 提出

紅唇をやすくかすも戦法

今 雨

町二 路郎先生に「妾となつて奪るも戦術」と云ふ句のあることを承知して此の句を提出するのは、ごちかも作者の「親の句であるからである」と云ふのは客觀的の場合は類

句は後から發表されたものは取り消すのを至當とするが、主觀句の場合は如何に内容なり、表現なりが似てゐても兩立す可きものと思ふからです。先生の句は、七七の型のものでしたが、これは十六音字で併かも座が四音字でとまつてゐるにかゝはらずリズムから云つても成功してゐると思ふ。

路郎 これもやつぱり七七の句だ。「こうしん」と詠まずに「くち」とよむので「紅唇をやすくかすも戦法」これで七七の句になつてゐる。「一寸御注意までに申言する」

町二 「紅唇」を「くち」と讀せるとすれば「紅」の字が餘計ではあるまいか。尤もさうきけば作者はおそらく先生の云はれる「くち」と讀んで七七の句をなしたのであらう。

路郎 「紅唇」を「くち」と讀せる事は無理かも知れない。そう讀ませなければ勢ひルビを附さなければならぬのであるが、「詩」としては文字の表現、即ち文字の力を藉りて

眼に訴へる事とリズムに讀むことに依つてその内容をはつきりさせたり効果的にさせたりすることは認めなければならぬ。二葉亭四迷などが出た時代の小説には漢字に特別の振り假名を用ひた事があるが、散文でさへもそうした必要を感じるものであるから詩に於いてはそれ等よりもより以上に必要な場合がある。けれどもそうした表現の仕方、已を得ざる場合に、好んでさう云ふ文字を使用しないようにした方が、いふだらう。

紋太 「これを「くち」と讀ませるのも川柳

表現上の戰々として許せるでせう。又「こうしん」と讀んでも一向差支へないように思はれる。却つてリズムのたゞしさが眞實味を助けはせぬかと思はれる。此の儘でもよいけれども、私は「やすくかした戦法」とした方が、いづれ此の句をよくはしないかと思ふ。

路郎 「紅唇」を「こうしん」と讀む場合には「やすくかすも戦法か」と「か」の字を入れた方が句としての落付が出來はしないか。このまゝでは何だか座りが悪い。裾の方に瑕がある。丁度電車の中で美し着飾つた女給の足袋や履物が無慘な姿を見せつてゐるやうな感じがする。何と云つても「こうしん」と讀めば戦法の後へ「か」とか「よ」とか云ふ様な叙法をとらなければ句としての落付がない。學人 此の句は七七の句として受入れる可きがリズム的にもはつきりとして生きてくる。「紅唇」の問題は盡されてゐると思ふ。では此の句をエロ百パーセント、現代的尖端の句と云ひたい。そう云へばと、内容がそれ程よい句だとは思はない。事實私はこゝう云ふ場合に接してゐないからだらう。ひろし 世 未らしい。エロ風景で場末の安カフエで受ける様な感じしか受けない。併しやすくかす紅唇の裏に世相が覗いてゐる。

山雨樓提出

片ちびの箒へ心すいて見え

櫻 果

山雨樓 ありふれた家庭風景の一端を捉

えた句であるが、しかも作者の素直な心さまが受取れて、惹付けられるものがある。箒が使ひ古されて、片ちびになつたさいふやうな事は別段心留める程の事ではない様なものであるが、さてふりがへつて自分の家庭のものであると見る時には、まんざら他人事とも思へないかつかさゝが湧いて来るものである。「併し」ながら目立つ様な片ちびをなした箒を眺めてゐると自分の心の真底を見透かされた様な感じが起つたのであらふ。味ひ深い句だと思ふ。

ひるし——片ちびな箒でなくとも、片ちびな下駄でも、或は靴であつても其人の氣性さ云つたものが窺はれる。特に箒としたのは其家庭の生活振りが透いて見えるといふ意味であらふと思ふ。

山雨樓——斯ふして句に現はして見ると成程、片ちびの箒といふものもありがちな平凡な姿にとれるけれども、自分の内の釘にかけられた箒といふものには、男として餘り氣づかないものであらふと思ふ。それを此作者が捉えた處になんとも云へぬ尊さを感じたい。琴人——此句のお説が、自己反省的に自分の家の事の様に解釋がありましたが、他家の家を見てそして自分を反省したといふ風にとれは、まじせんか。如何でせう……。

山雨樓——左ういふ鑑賞の仕方もあるであらうませうが、自分の家の箒として見る一方で一層味ひ深いと思ひます。

失太——此句では自分の箒といった感じの方が強いと思はれる。それは「箒へ」の「へ」に

よつてたもたれて居ると思ふ。是が「に」である時は自分とも他家ともつかないけれども、それに私は「心透いて見え」といふ言葉が、自己の性癖を省みてゐるのか、物質的の生活を言つてゐるのか、精神的の生活ぶりと言つてゐるのか、其處の所が隔靴搔痒の感ありと思はれる。「心透ひて」といふ言葉からは「箒に」の感じが非常に強い。

琴人——紋太氏が説明された、自他の區別はよく分りました。それから山雨樓氏の此句に對する解説同感だ。

紋太——「へ」と「に」とでは此句をひっくり返すほどの相違があると思ふ。

路郎——私達が家庭生活をしてゐて如何にも貧乏らしさが目立つものに、障子のむごたらしく破れたものと、疊のあちやけて波を打つてゐるのと箒の片ちびなの、ぶら下つてゐるのと等々々々がある。障子や疊は自分にも感じるし、他人からも感じられる至極代表的なものであるが、箒などは餘り他人からそれを感じる場合は、少ない様である。そこで茲に詠んだ片ちびの箒に、氣がついたのは勿論自分の家の箒である。然も提え易い様で提え得なかつたものを見付けたといふ感じがする。さうした片ちびの箒の哀れな姿を見たときに、如何にも貧乏らしい不甲斐ない己れの姿を心の中に描いたのである。私は此句を作者の生活に對する淋しい心持を、詠んだ

句として受取つてゐる。なんだか穴の中へ引張り込まれる様な淋しい句だ。

町二——成程片ちびの箒は面白い。併し「心透いて見え」はどうかと思ふ。僕にはどうも此句の哀さが判然しない。箒へ透く心さいふものがつき過ぎてゐる様に思ふ。

紋太——僕も云はせて貰ひたい。「箒に」であつたら完全に自己を客観した句が、他を蔑けすんだ句かに成ると思ふが「へ」であるから心透いて見への意味が、朦朧として来る様に思ふ。「へ」なれば直ぐに好い例は出し難いが「心すいとられ」とか「心蔑すまれ」とかの意味に叙したと思ふ。「心透いて見へ」はどうか他人様の様でいけない。

路郎——この場合箒を、擬人と見たらどうか自分の不甲斐ない心が、箒から如何にもみすばらしく見へた。それを作者が発見した箒の姿に自分の心を見たさいふ様に、解釋すれば「箒へ」の解釋はつきはしまいか。

琴人——成程擬人法として、此句を味つた時にはより鮮明に入入れられる。

紋太——それでも僕は「見透かされ」とか何とか變へたいと思ふ。好い例が出ぬのが残念でならない。

路郎——今云はれた「心見透かされ」と言へばいいだらう。其點心「透いて見へ」の表現は作者の一考すべきものだと思ふ。

粒々集

○ 松山 前田 五健

うつむけば髪の香ひの長火鉢
面會所火の無い火鉢巾をさり
驚いた馬振り上げた杵の様
改札のひまは車掌の爪を見る

○ 東京 富士野 鞍馬

罪ほろほしの様に重役はおごり
豊作の上に相場の慾があり
すき焼をしたこゝ鼠知つて来る
女給今日着物がかわり取まかれ
支那服が一ぺん着たい女事務
バスガール朱に交つて喋るこゝ
○ 大連 大島 壽明
神鈴へ凡願ばかり秋更くる
雑音のなかに生命を持ちこたえ

水草へそミ媚びて水流れゆく
群生の双手みにくき枝の柿

○ 御影 長崎 柳 秀

文章の讀む程うまい無心狀
寢は寢たが何か氣になる旅の床
空地今朝賣れたらしきの草を刈り
緊縮ミ別に探海燈は照し
潮干狩髪を氣にせば裾に風
春さきの日記にぬけた所も有り
人間が蟻に撮れてるスキ一場
よく出来て留守へ歸るにをしい
程々に吞めこは叔父の意見なり
獨唱の首はまだく上りさう
觀艦式當日を記念して
召艦近く吹奏なばかなり

創作 獎 懸賞川柳

募集の言葉

川柳の社會化運動といふことが徹底的に解つてゐないためにある人々を感通ひさせ大衆に媚びることによつて、作品の低下を招来しつゝあります。これでは從來の誤られたる川柳觀に、屋上屋を架するもので、心ある者の默視するに忍びないところであります。本社は

茲に見るところあり、弘く社會よりより其き作家のより其き作品を募つて創作獎勵の範たらしめんと左記の賞品又は記念品を贈呈することにいたしました。奮つて應募されんことを切望いたします。

課題「喜び」

選者 麻生路郎氏

賞 一等 貯蓄債券（拾圓券）一名
二等 同（五圓券）二名

（三等）川柳雜誌（壹年分）三名
佳作 若干名 記念品贈呈
句數 一枚五句以内（但一人にて幾枚投ずるも可）

用紙 「川柳雜誌」十月號より每號添附
締切 昭和五年十二月五日限
發表 昭和六年新春特輯號
（一月一日發行）誌上

投句所 川柳雜誌社内
創作獎勵懸賞川柳係宛

大阪市住吉區杭全町六〇三

川柳塔

□
□
□

松丘町二

酒憎むまでに僻んで夜の秋
闘ひに行くを妻に子怡ます
今俺に最短距離にあるぞ悪
家中の釘が腐つて十二月
父の腕に飯櫃ばかり大きくて
冬の辞典にあたりかき文字探せしが
秋風に富豪の門を罵りつ
蝙蝠の階級意識嘲らん
護り通した朝なり霧が眼に泌みる
眼の底に我が骨拾ふ筈を見し



關本雅幽

ごぢやくごつちも負けず爭議濟み
捨石になる役だけは空いてゐる
不景氣に慣れて手拭腰にあり
何處の鳥も黒いご便りして來たり
二合瓶龍田の紅葉うそ寒し
朝々を子に恵まれぬ鹽こんぶ
十月は絲爪の青さから秋
煮え切らぬ戀に睫毛を見つめたり
トラツクに乗れば味方だマルクスよ

助

水谷 鮎美

○
ぶろれたりや單行本になつて買ひ
板塀を廻つてぶろのもこの位置
一生をくちづけむにはさびしすぎ
子がものを言へば夫婦のたまろし

福田 山雨樓

○
電車からうつり山は向きをかえ
四十でふ女が笑ひこけてゐる
給料は國で羨むほごでなし
驛で待つ傘を袂へのぞかせる
兒を抱いた片手八百屋の荷をせせり
その夢の凶は蒲團の知らぬこ
瓦屋のけむり幼き戀ごころ

萬歳所見 (二句)

萬歳はうその笑ひの齒を見せて
萬歳は昨日と同じてに叩き
首をびく／＼驛長の靴
葉雞頭お前の戀がうらやまし

庄 万よし

選舉立會人として (三句)

生活を護る點字の手が慄え
成算を秘して署長の如才なき

酒井 駒人

○
家中で一つづつ食ふ柿の數
妻の身になれば酒さへ呑ぬ宵
運のない男にされて雇はれし
金策にくれば盛りの菊を見せ
秋の空友の便りも親しまれ
親類を親類させぬ未亡人

長男 病む

洗はれた靴が淋しい秋の午後

中島 鐵洲

○
食ふ丈でよいを朝聞き晩も聞く
默禮も嬉しきものの一つにて
祈り居る母の後をそつこゆき
金のいる女に秋の夜を話し

竹内 多聞

空の旅から

出 發 (本津川午後零時三十六分)

トランクミ別に命をさけて乗り
下 界

山飛べば草鞋のような氣にもなり

伊勢 灣

海の上濡れない足をうれしがり

空の世界
氣まぐれな鳥へあか目をして通り

豊川稻荷

神様も上へ拜むきたよりない

拍手を下へ叩いて笑はれる

秀峰富士

富士を見る硝子へみんな鼻を當て

清水港

次郎長がひる寝してゐる枕元

大井川

川止めに葬めくころも思はれて

朝顔をのせてあげたい大井川

箱根越

(低空)

手を延ばせば萩も折れそな箱根山

八王寺附近

機首下けて壼のやうな氣で戻り

立川着

(午後三時十分)

敗軍のようにプロペラ下りて来る

乗つて来た機を撫でゝやり撫でゝやり

○

朝田新水

水

倫落の江戸辯だけが得意なり

森へ去ぬ鳥を見てる病上り

客筋の悪いに俺も混ぜつてゐる

意地さいふものを心中残しとき

失業の上に病氣の子が戻り

双眼鏡赤のいまきの見えるここ

番臺の心易さに子を抱かし

世渡りを吃る仲仕の晝休み

破れし鏡に青く髻剃る男あり

主義をひそめて寺の庭ゆく

幽氣のごくビルデングへ三味

○ 松盛琴人

奏樂に巫女はぎうぐ廻りする

貧乏は心柄だご金を拭き

泣顔を見せればいゝと思つてゐる

氏もよく育ちもよくてあの氣性

○ 橋本緑雨

令夫人ご云はれ金がありますかね

年頃の姉も妹も肺を病み

失業に思ひもよらぬ人が来る

病んでるご落葉の音も淋しかり

酒呑みにしてくれたのは女にて

愛の巢へ戻れば父の据りけり

◇ 中野柳陽

忍従ご黙過ご白き釜の艶

風吹かば子の眼親の眼さかなの目

安東Tへ

向ひ合ふ鐘ビエロに成り切れず

◇ 丸山 公二

暇貰ふ話へ犬も慕ひより
猥談のひまり支那そば云ひに立ち
郷愁へ三羽四羽五羽渡り鳥
流轉の身希望はごくに消へ失せし

◇ 須崎 豆秋

いわしいわしなすびなすびの日がつき
父さん逆立ちをして飯を待ち
あれも毒これも毒みな食べささず
儲けてくれさ橋で別れぬ
いやらしいこまが聞える交換手
夜が明けて見れば軍艦もう居らず
カーテンへ雀が映る社長室

◇ 越中 今雨

意見だけする叔父が二階借
叱らずに教えてネーさくすほらせ
しんみりさ語るに枕かたすぎる

大阪に遊ぶ

バスガールガソリンガール居るもよし

◇ 木村 晃卓

黙々さ床を並べて夫婦病み
一息に鯉の血をのむ眼をつむり
大學を出た知らせから死のしらせ

友の死や思ひはよはき身に及び
十二月それまた来るぞ心なき
借金を棒引にする死を思ひ
末の子へもう母上の眼も見えで

◇ 池田 雪峰

乙女心よ銀杏を本へはさむ娘よ

無責任な女で有れさ子は生みぬ

こんな世に未練が有つて醫者に見せ

◇ 中野 裸人

三人の中に女房がきよこんごる
子等は皆教訓にうえてゐる
父親も女車掌にするつもり
出前持厚いフェルト見てもごり
一人身で居ればシヤケなご賣りに来る
死にしなの世話をたよりの義理の親

◇ 川村 観月

灰色の空氣へ柱時計鳴る
生活の剃刀あわすひまがある

◇ 山本 凡々子

プルデョアの顔神経痛に歪んで来
秋の月さがるさ見たたり労働者
淋しさを言はず勝氣な娘は唱ひ
青白い手の幸福に堪え切れず

◇ 喜多春秋

都々逸を教へてもらふ年になり
不幸にも死ねる汽車道近かつた
心配へ醫者はしづかに手を洗ひ

◇ 水田光穂

臆病になつたを角が取れたさ
靴下のやぶれを子供をかしがり

◇ 日野華水

肩もてばた々唇のおのゝける
貴女からお前になつて無事な戀

年寄もまじつて別な話なり
友達へ忠告らしい灯を點し

共稼ぎ女が歸つた音を立て

◇ 熊木黄蛾

振袖を捨てず日本の娘に育て

◇ 藤岡櫻果

朝風呂を出るさもうない星の影

病床吟 (二句)

風邪心地なぜか濡絆が身に添はず

汽車の笛でもないらしい耳が鳴り

大根引く袂へ零餘子こいけ込み

子等健やかに寝間せまりゆく

團參の噂は歌を枝に突き

心が待ち戸を打つ風に立ち上り

◇ 西田艸樂

もう少し圓みの欲しい顔の夢
菊生けた玄關の並び三味の音

◇ 西村明珠

抱き上げた子丈けに見える支那手品
遠足の隣りも同じ卯焼

笑顔よし次の人へは疲れてる
笑らなくつた母さ來る本願寺

叱りこも亦苦勞するな水枕
煙煙北へ行くのはよしてくれ

石一本の指の一つにさる音を立て
十本の口を封じた茶の出ばなる

催促の失業時代
ふんだんにこき使はれて満足し

紀元二千五百九十年を忘れてた

◇ 河野双車

いろは順さほもの足らぬ並べがた

脱線は汽車でもしますあやまりな

逢曳をするにバイブル等持つて

◇ 三好計加

曼珠沙華を小牛倒してやつてくる

讀んでるさ蟲のしやけたが挟まれて

のらりくらりさ歩けばステッキも落ちる

驛長のやうな小使の高笑ひ

鉛筆をもたせば丸いものを書き

時計のやうに時間の合つた腹工合

柿のうまさを話して歩く二人連れ
 竹にさした荷物夫婦で提けて居り
 コスモスのヒヨロ／＼高く塀をぬき
 うたゝねに女房枕をすけてくれ
 手鏡を俯伏にして何處へいた
 琴もあつて娘ゐるなぞ待つてゐる
 自轉車の二つ並んで過ぎてゆく
 野の花を活けてるこはやさしさう
 獨り騒ぐは蚤を逃がして
 ◇ 櫻井 圓角
 優越を感じ一點まけて置き
 鼎の軽さにやす／＼戦ひぬ
 ◇ 上野 錦水
 提防の様な野球の向ふ側
 二言目には親である兄である
 体面を維持するだけの忙しさ
 猫より優れた豆腐買はされる
 生活に逐はれて今日も鐘を聞き
 短かく言つて届く言傳
 ◇ 平井 蒼太
 涙ため私はぢつと立つてやう
 あす會はふあす會はふて會はざりき
 によりりゝ賣女の脛が出て來た
 わんたんがぬるりゝ齒からほれてる
 ◇ 中澤 濁水
 赤ちやんの會へ出すぞ重く抱き
 抱車夫不機嫌らしく乗せて曳き

學問は好いが世才の鈍さ
 看護婦は科長へ尿を捧げもち
 ◇ 楊井 二南
 ソファアールよ戀の重さがわかるかい
 經驗があつて危ないことを云ふ
 出て行け云へば出て行く子にき
 見えすいた嘘へ挨拶して呉れ
 失見の明あつて傘貸して呉れ
 奉祝の街
 電飾を見逃がして行く土地の人
 觀艦式風景 (三句)
 天皇旗から眞直ぐに風を受け
 あれが陸奥あれが霧島朝霧の
 ◇ 中見 光路
 べちやんこにされてキューピー捨てられる
 ゆつたりゝ仕立卸で坐つて見
 頬骨が高く求職斷はられ
 口紅に今日あざわかん人の數
 妻 病む
 病妻が死ねばと思ひ子を思ひ
 ◇ 阿部 閑生
 こつびぎく八方美人へこまされ
 所在なさ下なる脚を上へ組み
 放擲さ把握のあひにある戀か
 無頼漢こゝろの奥へ歸つて居
 夫婦ふゝ淋しいことを考へる
 しかすがに蕃人滅ぶこゝなけれ



机上庭園雜草

綿谷摩耶火

(四)日の鼠

光陰の過ぎ去る事を古人は金烏玉兔に喩えた。これを鼠に喩えて日の鼠云ひ初めたのは果して何に依つて然るかを知らぬ。合卷『伊達姿辰巳八景』序に『七つさかりの日の鼠』云ふ、蓋し鼠が光陰を齧るに喩えた物か。

長岡樓風氏が嘗て紹介された川柳入り赤本『浮世めがね』に左の小話が見える

○日鼠

此鼠は正月の元旦より暮の大晦日まで駈廻る故猫も中々取る事は叶はず去れば人々も常々家業に怠る此鼠が借金鳥さ化けて責に来るなり○住穴もなくていそがし日の鼠。

教訓川柳なんだから句もダラシが無い。雞諺書から關係句を採録して置きませう

(1) 白き齒の黒く成たる日の鼠

(武玉川、十八)

は女子の成長を云へる句。

(2) 日の鼠情賣る身の夜追ふて

(ケイ、四)

(3) 賀や幾度眉毛も白き日の鼠 同右

(4) 葬に一輪死に日の鼠 (ケイ、三)

葬は、朝顔

(5) 頭陀袋いつか喰切る日の鼠

(ケイ、七。同十七)

(五) 許嫁句抄

小生の好尚として、ロオマンテイックな句、及び慶靜な句が好きなものですから、此處に許嫁を素材とした句を集めて見ました。

(1) 見るに隠れる言名付同土

(一枝筆、三)

(2) 遊ぶにも奥齒にもの言名付

(武玉川、十八)

(3) 行逢て味にねぢれる言名付

(同、十八)

(4) 挨拶の何か角たつ云號

(ケイ、二十二)

(5) 言名付腹たちさうに差向ひ

(童的、四)

(6) 言名付今では中がわるいやら

(川傍柳、二)

(7) 言名付さつち付すの辭宜をして

(武玉川、十七)

(8) しこなして袴をたゝむいゝなづけ

(柳多留、五) さくらの實

(9) 言なづけたがい違ひに風を引き

(柳多留、初)

(10) 縫ながら額で見たる言ひ名付

(武玉川、六)

段々相惚れの氣味に成つて來たから其の方面の句を窺ひて見る

○けつく遠くに居る合惚 (ケイ、十八)

○大中わるのやうな相惚 百賢編

○我も惚向ふも惚て無言なり (ケイ、四)

プラトニック・ラブの妙語は恐らく此處

らに見ひ出せるのだらう。

○只縫ふて居て額にて見る (武玉川、三)

の句は(10)に共に巧緻な短詩だ。

(11)よいちゑは一つも付ぬ言名付

(同、十二)

(12)立習ふ子に這習ふ言名付(同、十八)

(13)云名付晨舞して歸りけり(同、八)

(14)世間を見るな、云名付(同、七)

(15)言名付藏へ仕舞は計り也(同、十八)

(16)云名付人身御供にしてや(同、八)

(17)云名付女心の古くなり(同、八)

(18)言名付うつづいて居る顔でなし

(同、九)

(19)似たさいふ顔を見たがる言名付

(同、十四)

(20)風巾あける糸、同仕の六號ケ

(ケイ、二十二)

(21)こらへ性なく云號ふる(同、三)

(22)姉にこり妹に戀て言名付(章的、三)

(23)言名付桐は木挽が手にかゝり

(武玉川、十八)

(24)言號まだ水物の内にして(ケイ、五)

最末の句は次掲句の脱胎。

○水ものゝ内から母の掣ゑる(ケイ、四)

序ながら擬人句ひこつ

(25)神代より柳櫻言名付(武玉川、十六)

探點出來る句有り、すれば精々第十句迄

の内でせう。型にはまつた作品は古句に

も新句にも有つて、見方は無論各人各様

さは云へ、並べて見る鼻について來る

場合も有ります。革新句云へ型には

まるのはまぬがれ難いもの、重壓的な主

觀の羅列では濕ほびがなくてイヤに精神

が緊張して仕舞ひます。川柳塔閣には相

當浪漫的な作が有るので助かる。正月號

以降書拔作成中いづれ纏めて鑑賞させて

頂きます。(十月二十八日記す曇れる晝)

松山 武

子

岐阜 誼

女

光

さらり／＼水の流れのうらやまし
美しくい心へ鐘のひびく音
生きたため人情もありぐちもあり
米原で東京行のなつかしく

魚崎 吟

女

大阪 壽枝

女

耀

閑人の様に云はれて淋しがり
病床にしみ／＼箆筒のきずを見る

觀艦式

飛行機に軍艦しばし忘れられ

大阪 よし

江

大阪 房

子

抄

桃色のアンブレラよ顔見せろ
字の通り言へば輝露骨なり
丙うま娘矢張りその氣で居

咲き初める梅に陽ざしの裏表
鶯の付け仔に茶なきたてゝ居る
花嫁の姉の寫真がいま届き

大阪 勝

女



近作柳樽

ひろし選

目張する障子に逝ける兒を思ひ 大阪 鶴峯

晝の風呂あんまそろく唄ひ出し 同 同

眞實を云へばびつくりする芝居 同 同
 (評)プロレ劇の背後にあるものこそ、大衆の矚線にふれるものをもつて居る。大衆の目覚めこそブルジョアのものつとも恐るゝところである。

男つてみんなそうさミ里の母 島根 龍村

啞娘お針上手になるばかり 同 同
 陽ざしする障子さみしく秋を病む 同 同

(評)里の母親に、夫への不満をうつたへて居る、若き妻の姿がよく出て居る。「陽ざしする」は可成センチメンタルではあるが、弱々しい病人の様子が覗へる句。

満願の今日は御飯がよくすゝみ 大阪 方眠
 神様は公平せつせご働かん 同 同

(評)せつせと働いて居る善良な人間を氣の毒に思ふ。この男に於ても神様に恵みを與へたまへ。然し資本を主義第三期に於て働く者に幸福が與へられようか、此句はそうした思索をして居ない。

青空へ市場のくらさからのがれ 京都 司郎

建築場足場に薙暮れ残り 同 同

(評)「青空へ」がくらさから逃れに對しあまりにひつつきすぎて居る。一考を要す。

「足場に暮れ残る薙」建築場のある情景は出て居る。

フライビンズやれば辻占賣り忘れ 神戸 桃水
 見忘れた兒を乳母の手へあきらめる 同 同

(評)「フライビンズ」を貰つたうれしさに辻占を賣る事も忘れた哀れな人の子に涙なくてはならぬ。上かんやか、カフエーのシーンである。然しこの辻占賣りも、一晩いくらかで借りら

れた、所謂親方の搾取物である事を忘るゝ勿れ。「見忘れた兒」生みの親より育ての親なり。

それから見込まれ申すのない養子 郡山 右月
賣り喰ひに来るこゝ迄は來てしまひ 同 同

(評)「それから」ははつきりせぬ言葉なり。「賣り喰ひ」の果もう死か、盗かの十字路まで來てしまつた。そこにまた一方の血路のあるもの。この作者ものんきにみて居るようだ。

まち／＼の心同志の夫婦なる 大阪 四九磨
(評)ベターハーフと稱すれど、世の中の夫婦のやがてはまち／＼の心さなるぞ詮なき。

降り支度ババに子供を渡したり 鷄之莊 普天
(評)郊外電車に見受けるモダン夫婦をよくスケッチせり。

死んだある若き大工へ
お前のかんな屑が舞ふてゐるぞ 大阪 紫光
(評)若くして逝きし大工の前書によつて實感をそゝる句である。

二十八洗濯するもつらいもの 伊丹 松好齋
(評)獨身者の悲哀！

もがく程鴉の蠅仆れ込み 大阪 鯉友
(評)哀れなる蠅よ。そして哀れなる階級意識なき没落階級よ。

出納簿夫婦喧嘩の種を蒔き 香川 竹舟
母親は息子の下座に手をつかへ 大阪 靜香
吸ひつける煙草に親しくなつて居し 大聖寺 一安

(評)カフェーがお茶屋の女に親しみゆく氣持ならんも、「なつて居し」は泡の如くはかなき戀ならん。

女店員電車の中で編みつゞけ 大阪 涼哉
迷ひ子の守り袋が光つてゐる 犬山 練屋丁

(評)祖母さんの心づくしの守袋にも、住所姓名の記入なきぞ手落なる。

失業の身にはちがつた月に見え 大阪 一騎
大分涼しくなつたよミ風邪聲 富山 政斗
虫よもつミ鳴け俺も孤獨だ 大阪 露行

(評)刀三の句に「虫鳴けば鳴くで原稿料になり」がある。比較して研究を乞ふ。

言分をたくさん貯めて居る無口 愛知 巧笑
尺八の師匠寅ほご首を振り 大阪 詩郎
手の中で蜻蛉は首を廻しみる 長野 蛙鼓

お茶が沸きましたミ蒲團を取られ 大阪 紅
荒海へ出るミ汽船の飯になり 大分 佐津久
子で苦勞孫で苦勞ミ老いてゆき 大阪 山月

減免に小作が騒ぐ 延旗 新潟 爲八
(評)作者はこの蓮旗をどうみたか、たゞ小作人共が騒いでるとのみでは深味がない。この騒ぎをたらず、この社會組織、資本主義經濟の仕組みに對し檢討の思案を欲する。

本主義經濟の仕組みに對し檢討の思案を欲する。
ケーブルの隅へ疲れた足をたて 大阪 千春
年頃の姉はふごんを着せてやり 備中 燕
油の切れた鐵の悲鳴よ 不明 竹城

(評)悲鳴を發するもの、あに鐵のみならんや。
今日もまた雨かミラゲツトなでゝ居る 不明 立身生



唐柳短解

蛭子生

(一四)吳用からうまく謀つたしびれ酒
水滸諸傳に、『吳用生辰綱を智をもつて取る』の一節がある。楊志外十四人が十一櫃に金銀珍具を入れて居るのを、晁蓋に化けた吳用等のため、蒙汗藥の災難に罹る。

『桶の内なる酒匂に、一人の豪客一瓢を汲取て飲しかば、此分を價の中にて議申さんに、四貫五百文の鳥目を償ひたまへ十一人の輩是を聞て、何ぞ僅々の事を論ぜんやとて、五貫の鳥目を與へしかば、彼漢子大に悦び、遂に空桶を荷ひて、再び岡の下に下りけり。一行渾て十五人の輩、忽ち手足麻木て、盡く地上に打倒れ、恰も死人の如くにて、只動くものは

兩眼のみなり。七人の豪客等が晁蓋の賀物皆奪取て、驛行を打眺めてぞ居たりけり。此七人は吳用、晁蓋、公孫勝、劉唐、阮小二、阮小五、阮小七等あり。』
(附記)麻木はシビレこむ。『麻の原字が麻』古今醫統には麻木叙論なごある古句に

麻木をきらし聞いてあゝ水滸傳
此の知解も亦シビレのされる、讀み物ではある。

(二五)和睦後は、一丈育が粗しかれ
茶〇だと亭主はみえぬ、三娘一丈育は水滸傳中の女丈夫で、單身王矮虎を捕え、何人もちかより得ない、武勇を示す。『餘は恐るゝに足らず』雖も

續川柳家の戸籍調

係 山 雨 樓

(一)姓名(二)雅號及別號(三)出生地(四)現住所(五)生年月日(六)職業又は勤務先(七)好きな句(八)自信の句(九)川柳以外の趣味(一〇)配偶者及子供の有無(一一)嫌ひなものと(一二)川柳に手を染めた年月

(380)

小 川 舟 人

(一)小川松之助(二)舟人、鷄中堂、皆空洞、中江一九二二(三)大阪市(四)大阪市此花區中江町八四(五)明治三十年四月七日(六)鷄卵經節商(七)大切に神馬唐待されてゐる當百氏(八)玉子屋が一つ落した周章てやゝ(九)讀書、此頃は全生活に興味にしています(一〇)妻と子供二男二女あり(一一)金持、兵隊、今の社會(一二)大正五年三月

(381)

松 川 青 影 子

(一)松川種次郎(二)青影子(三)大阪市南區順慶町三丁目十三番地(四)同西區北堀江通一丁目十四番地(五)明治三十七年六月十八日(六)紙製加工業(七)北風は地につく雪をおさらせる 溪花坊(八)まだ出来ません(九)旅行、觀劇、繪畫の鑑賞、廣告に關するものゝ蒐集(一〇)無(一一)氣儘者ですからもたたくさんあつて困ります(一二)大正十二年秋頃

彼女軍一丈青、三娘、極めて能く兩刀を使つて、萬夫不當の勇あり」を評されて居る。

然し遂に東京八十萬禁軍教頭の豹子頭林冲のために、いましめこなる。「一丈青を梁山泊に送り、父宋太公に預け、宜しく守らしむべき由を云ひければ、諸人皆宋公之を娶らん」と懇に一丈青を監押す。

(別録)千里越す仇つかの間に、巴提便うちTK氏より御質疑をうけし句、便宜ここに記して貰ふ。巴提便はハデス讀む。虎を刺殺した事から、上五は千里の藪を越すを、利用したに過ぎぬ。

日本書紀に、冬十一月(欽明天皇六年の事)膳臣巴提便、還自百濟吉、臣被遣使、妻子相逐去、行至百濟濱、日晚停宿小兒忽亡、不知所之、其夜大雪、天曉始求、有虎連跡、臣乃帶刀擐甲、尋至嶺岫拔刀曰、敬受絲綸、劬勞陸櫛、海風沐雨藉草荆者、爲實其子令紹父業也、惟汝威神、愛子一也、今夜兒亡、追蹤竟至、不畏亡命、欲報故來、既而其虎進前、關口欲噬、巴提便忽申左手、執其虎舌、右

手刺殺、剥取皮還。

(一二)曲つた笠のため直す謝靈運
ヒゲの長いので有名な謝靈運は、殊に博覧強記にして、江左第一の文章家、永嘉の太守となる。

靈運が踊するに、常に木履を著く。山に上るには、その前歯を去り、山を下るには、其後歯を去るこいふ。曲つた笠を今思ひ當らぬ。

合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙附(金文字入)で書架を飾るにふさはしい簡素な装帧に出来ました。

第一卷 第二卷 各金五圓也
第三卷 第四卷 各金參圓也
第五卷 第六卷 各金參圓也
當分第五卷 特價金壹圓五拾錢
卷に限り 各送料十八錢

向古い川柳雜誌御入用の方は、特に左の値段でお頒ち致します。いづれも下記宛御申込下さい。

第二號より第五九まで

各一部 金拾錢
第六十號より第七十一號まで

各一部 金貳拾錢

(但し一號九號十二號廿一號廿五號廿六號廿七號はありませぬ)

(232)

今村良之祐

(一)今村良之祐(二)良之祐 別號夢溪、宇宙變人三熊本縣川尻町御船手(四)京都市外深草町下河原二七(五)明治三十年三月三十日(六)會計(七)舊「長風呂を致しました」嫁かへり「毎つて來て立たされける」芝居新文壇さいふものはつまり飲仲間「脱脂綿をしき握れば空に歸し」等々(八)最近では「はごきもの袂の隅にほこり立ち」燃え上る風呂の明りに下駄が見え(九)趣味が多すぎて困つてゐます(一〇)有、子供死別(一一)にやけた奴(一二)大正五年 句三川柳 活字になつたのを見る、小學校時代より短詩形なものを愛す、川柳中絶俳句に入る、大正十三年俳號淡水三供に捨て、夢路氏の一文字を貰ふ、爾來番傘に育つ、癸二ヶ年、野菊七號で廢刊、今日川柳街に至る

(233) 桑原狂雨

(一)桑原美一郎(二)狂雨三岐原縣稻葉郡芥見村(四)大阪市東區北久寶寺町四丁目野口泰次方(五)明治四十四年十一月十五日(六)大阪三品取引所取引員店員(七)綺麗な句餘韻の有る句(八)「初奉公夜店の安い事を聞き」自信は有りませぬ、經驗が有ります(九)基、野球、外色々(一〇)獨身(一一)これで思ひ出せませぬ(一二)十七才の半ば頃三記憶します、毎夕柳壇に投句。

町二君のプロフキル

安 西 杏 三

三〇

私は今、珍らしく膝もくずさずに行儀よく一冊のノートに對して座つて居る。ノートには川柳塔から拔萃した町二君の句が書附けてある。

頬骨へ大大阪の煤が降る
持てあます閑電車賃ばかり剪る
襪垢重く季節はつれの服を着て
恩に被る人のみふえて春寒し
坐食してやこなしの愚を守る
目覺しばかり味方頗する
此等の句には資本主義經濟組織の必然の結果として、産業豫備軍に墮された、寂しい一人のプロレタリアートの姿がいみじくも素直に描き出されて居るではないか。而も彼は決して徒らな反抗を試みやうとはしない。却つて

逆境に處して寂しや眼が突る
さ、こもあれば反逆的にならうとする自分の魂を窘めてゐる。實に君の自省力

の強さには心を打たれる。

獲ち得ず道化芝居のエキストラ
哄笑のかげの弱さを見透かされ
食ふために追従笑が出かゝるよ
ふと氣がつけば揉手してゐる
愛の果にあゝわが生命腐りゆく
何れも自己の現狀に満足せず、安心をせずして鋭い反省のメスを我が魂に深くも突刺して居るではないか。併し君は自身に對して決して失望をしては居ない。うては響く我さ信じて疑はず

此の句は如何なる逆境にあつても屈しない、自己を信ずる念の厚い君の心境を巧みに、端的に詠まれてゐる。斯のやうな鋭いメスは又現代生活に對しても默しては居ない。

(一)朝は哀し昨日の汗と明日の米
(二)ブチアルといふ蝙蝠の黄昏だ
(三)三部紅葉卷半蟲アルサヨアジ

(四)猿ばかりある風景の都會音
(五)犬も鶏も人間ばかり目出度がる

(一)のプロロのはかない生活を詠める(二)のプロミアルの双方から壓迫されて蝙蝠の如き生活をやうやくに續けてゐるブチアルを諷刺したもの(三)の剩餘價値の吸収に日も足らざるブルが自業自得遂に身動きもきれなくなつてゐる有様を巧妙に詠へる、皆さういふに面白い(四)は都會生活者の流行をのみ追つて個性を失へるのを痛快に諷して居り(五)の天地自然の運行に便宜上區劃をつけたのはよいが之に囚はれて大晦日だま云つて悲しみ元日を稱して目出度がる人間の生活を嘲笑せるあたり實に巧手である。

併し之等の鋭さは秋霜烈日毫も假情する處なし云ふやうなものではなく皆一脈の温かさを藏して居る。君が温情の人であることは以上の句でも解るが波紋一つ起らず池に蚊が溺れ豚の仔のなかしや乳を飲みこぼし冬の案山子君も失業しましたれあかんべを返し乞食の子の自尊の叫き弱少なものを棄てゝ省みられないも

硝子戸の風の白さに黙りがち

春夏秋冬の他人となつた冬

其別々に置いた方へいふ所には、たゞたゞの
 我々も おちく ま おも
 で、公共より目して待つべきであると思ふ



一路集

(募集句)

鐵 森 東 魚 選

砲丸投へ榮へる夕焼
鐵鏈の火花に我れの生を見る
二十度の鐵人間の腫は光り
鐵板の上にあぶなく子が遊び
ハンマーの響に親子恙がなし
鐵門に木柵が出来爭議中
鐵瓶の朝湯へふつこ湯が居り
のみたらぬ眠に鐵瓶の湯がたぎ
今度こそ鐵石心で一度嫁ぎ
ハンマーの音からパンへ連絡し
鐵橋もあつて子供の旅うれし
暑そうなサイレンが鳴る鐵工所
血を吸つた鐵路しらへ光る
失業は其の鐵腕で米を磨ぎ
鐵瓶の艶も其家のものにして
鐵橋の長い割には水はなし
鐵さびが身にしむ汗の仲仕なり
すぐ前に落て砲丸笑はれる
鐵工所わざこの様な音がする

佐保蘭 桂舟 千春 憲坊 英賀夫 普天 司郎 雀の子 失名 落葉 松枝 靈壺 有爲郎 紅 ありら 涼哉 四五磨 丁路 馬

從順な鐵よ化學にひれ伏しぬ
今火花散らす鍛冶場の音になり
鐵工場覗けば黒い顔ばかり
腕白がくるこ鐵板踏ならし
鐵鉋の先ばかり行く塀の外
鐵瓶の湯氣へ女將の物思ひ
鐵筋の工事日毎に聳へて來
よく隊ご鍛冶屋近所の愚痴に
緊縮をよそに鐵腕投手賣れ
ヒヤリと觸れる鐵の眞心
鐵工場馬賊のやうなのが唄ひ
腦病院の鐵柵へ散る木の葉
鐵工場ここら静な月になり
鐵工場大きな聲で晝にする
(佳)鐵橋が問題なる名勝地
(佳)鐵橋の響きに月見草は揺れ
(佳)眞直ぐにいつそ淋鐵路延び
鐵骨の立つまでに來て欺偽知れ
夫婦中鐵で鐵ではあるまいが

湖山 耕民 今雨 吐句坊 柳次 同 柳兒 同 磨耶天 同 雨 同 桃水 同 菊路 同 没食子 同 湧泉 同 森東魚



町全杭
MEMO
縁 雨

▼岩崎路路・中野柳陽の兩君が十月十八日滿洲の開原でしたしく語合つて時の過ぐるのを知らなかつたといふなつかしい便りを受けます。

▼桑原京郎君は 十月中旬目出度く華觸の典を挙げられたそうです。

▼櫻井圓角君と生田翠夢君とが 十一月四日琴平・屋島方面の旅行先から「壇の浦かはら投げに與市偲べり」圓角「壇浦平家を偲ぶ俄雨」翠夢の句を寄せられました。

▼中野樸人君は今回社友なられました、今後の活躍を祈ります。

▼宮城啞亭君は岸本水府君の 媒酌で横川みよ子さんと大阪で 目出度結婚されたそうです。

▼舊同人高見柳骨君は 十一月十一日四國方面へ旅行されました。琴平からの句に「石段が邪寛くさくなる神詣り」

▼富士野鞍馬君から 十月二十二日驪原二泊仙都二泊同、十一月十一日相洲湯ヶ原二泊の旅び便りを寄せられました。

奥 齒

中 野 柳 陽 選

其、事、承、知、奥、齒、か、み、し、め、る
大、欠、伸、す、れ、は、奥、齒、へ、あ、た、る、風
末、だ、う、ず、く、奥、齒、に、話、ま、こ、ら、ず
長、命、を、訪、へ、ば、奥、齒、の、眼、の、自、慢
憎、惡、の、眼、奥、齒、に、物、を、は、さ、ま、せ、て
ゆ、く、秘、の、夢、に、奥、齒、が、抜、て、居、る
妻、揚、子、歪、め、た、顔、へ、屈、き、か、ね
泣、き、聲、を、漏、ら、さ、ぬ、奥、齒、音、を、立、て
水、藥、が、奥、齒、へ、し、み、て、十、二、月

勵 一 友 村 芳 暢 草 柳 豆 勝 二 佛 二

失 策

水 谷 結 美 共 選

一、本、を、た、よ、る、奥、齒、に、し、み、る、風
(佳)か、み、し、奥、齒、へ、思、慮、の、眼、勢
(佳)妻、揚、子、奥、齒、が、す、む、こ、か、く、き、き
奥、齒、に、残、る、今、日、の、さ、か、ひ
(佳)飽、食、の、欠、伸、奥、齒、へ、觸、る、風
涼、み、奥、齒、の、見、へ、る、ナ、ン、セ、ン、ス
追、句 中、野 柳 陽
佛、心、へ、チ、カ、ト、小、石、を、噛、み、あ、て、る
一、點、の、凝、視、噛、み、碎、く、筆、の、軸

湖 山 耕 民 磨 耶 火 英 賀 夫 吉 郎 柳 陽



結

美 共 選

失、策、の、打、ち、明、け、ら、れ、ぬ、日、が、續、き
失、策、の、も、う、辭、職、す、る、つ、も、り、で、居
失、策、を、笑、つ、て、す、ま、す、課、長、に、て
失、策、の、小、さ、く、な、つ、て、飯、を、食、ひ
成、功、し、て、失、策、を、語、る、な、り
失、策、も、し、た、か、り、頃、貯、め、て、る
失、策、へ、應、援、團、の、聲、こ、な、り
金、錢、で、す、ま、ぬ、失、策、し、て、戻、り
失、策、の、顔、が、油、ぎ、つ、て、る
失、策、へ、強、談、た、び、く、や、つ、て、來、る
失、策、の、妻、へ、亭、主、は、た、す、な、り
失、策、も、な、く、て、五、十、の、平、社、員
失、策、で、す、ま、ず、重、役、引、致、さ、れ
失、策、へ、ラ、ヂ、オ、大、き、な、聲、に、な、り
失、策、を、替、つ、て、母、は、詫、び、て、や、り

勝 二 晋 天 有 爲 郎 湧 泉 志 洋 桂 枝 佐 保 蘭 没 食 子 明 珠 憲 坊 靜 香 靈 峰 雪 柳 紫 石

失、策、の、歸、り、夜、店、を、見、て、も、ご、り
失、策、へ、元、氣、に、肩、を、た、く、く、友
失、策、に、胸、さ、き、く、ご、前、へ、出、る
失、策、も、な、く、表、彰、の、今、日、に、あ、ひ
失、策、を、不、可、力、こ、う、ま、く、逃、け
失、策、へ、同、情、す、れ、ば、聞、か、さ、れ、る
失、策、の、も、う、想、像、に、ば、か、り、す、ぎ
失、策、を、母、な、れ、ば、こ、そ、笑、ふ、て、る
失、策、を、考、へ、通、り、さ、こ、さ、れ、る
失、策、の、仕、損、じ、愛、嬌、め、い、て、る
曲、藝、の、か、く、せ、ず、顔、に、あら、は、れ、る
失、策、の、か、く、せ、ず、顔、に、あら、は、れ、る
失、策、へ、社、長、葉、巻、を、お、い、て、立、ち
失、策、を、母、は、若、氣、の、事、に、す、る
失、策、が、幸、福、に、な、り、友、に、會、ひ
失、策、を、失、策、こ、せ、ず、子、を、吐、り
失、策、は、公、傷、ら、しい、顔、で、く、る

裸 人 柳 精 四 五 磨 紅 笑 桃 水 涼 二 忠 木 摩 耶 火 松 好 齋 芳 村 湖 山 耕 民 白 雨 山 月

年 賀 廣 告 を 募 る

▼竹田青穂君は十一月八日紀洲方面同十一月十三日大和國多武峯からの旅信がありました。

▼西山玄々子君から、松山城築造主加藤嘉明

「川柳雜誌」は今や八歳の春を迎へんとするに際し「新春特輯號」(三十錢)は内容を劃期的に一新すると共に普通號並に値下を斷行し同時に大増刷をします。此の盛運に達したことは偏へに各位の御援助の賜物と感謝してゐます。

例に依つて「年賀廣告」を募集致します。大増刷の關係上十二月十日で御申込を締切ります。御賛同の上御芳名を掲げさせて戴きとう存じます。

柳友各位の御便宜を計り特に左の便法を設けました。振替利用前金に願ひます。三錢以下の切手代用でも差支へありません。

- ◇ 一口 金五拾錢
- ◇ 半頁 金四圓
- ◇ 一頁 金七圓

公の三百年祭と市制四十年の祝賀會とで十一月一日から五日迄當市は非常な大賑ひだつたの便りました。

▼福田鶴峯君は十月十四日、故令息葬儀のた

失策に氣付いたらしい顔の色 吐句坊

君と私の五人で致しました。

失策を考へ通りさこされる
失策の今日一日を休んでる
失策に帽子よごれたゞけのこと
一人の失策へ工場しんごする
失策を母に語らずほころばし
失策の空は晴れたり曇つたり
しくじりを打ち明けられる年々
失策に母一人だけ涙ぐむ
女房の失策金を皆拂ひ
失策の不意に時間なきを聞き
失策の煙草を吸ふてばかりゐる

木馬
双車
新水
白雨
スエノ
明珠
同裸人
同觀月

失策の故郷の空を眺める
失策が少し後れて 膳に来る
泣きやまぬ瘤を手守は賞收し
しくじつた前試験 の 歸り道
失策を又ぞろ例に引き出され
失策へ父は大概厭 を つむり
誤ちを叱られる迄待ちきれず
わざとらしくも見えるやり損じ
仕出かして仕舞つた事に二三日
(軸)失策の口をぬぐ、た醫者の髻髪

同桃水
同雨町
同
同
同
同
同
同
同
同
同
閑生

觀同裸同明同ス白新双木
月人珠エノ雨水車馬

失策の故郷の空を眺める 同
失策が少し後れて 驛に來る 桃水
泣きやまぬ瘤を子守は貰收し 同
しくじつた試験の歸り道 雨町
失策を父ぞる例に引き出され 同
失策へ父は大概眼をちむり 同
誤ちを吐られる迄待ちきれず 摩耶火
わざとらしくも見えるやり損じ 同
仕出かして仕舞つた事に二三日 同
(軸失策の口をぬぐ、醫者の髻 閑生

▼十一頁より續く▲

こなり、
神經しんけいこ化くわし、
太陽たいやうこもなり得うる理智りち……

…京郎君の持つ理智が、理智派詩人として如何に明日の川柳を開拓するか私は興味をもつて眺めてゐる。

ゆるすゆるえもないぢやないかい火がこり
難然こ撫然こ大學出ぢやさうな
なんせもう不景氣なので手を焼り
もう一度化けてくるよなこぢやなし
借つて來て返すこお前そんな氣か

大社前にて

帳落になつてまへんか出雲神

同

これは作者の理智の表現が安易なる世界へ轉落しつゝある姿にして私は採らない。
 雜然ミ、なんせもうもつ、一度の句等鋭いサタイヤの閃きを見るが、惜しいこゝに詩

きんさば
さしての氣品に乏しく、一體に調子が低い。品格が無く調べが卑しいといふことは、

しばく川柳の陥る一つの陥穽、然り只一つの陥穽である。

力 十 ム 喫 茶 店

心ブラにお出での節
は是非お立寄を
緊縮時代に最も適合
した

カナメ喫茶店へ

柳人は特に歓迎いたします。

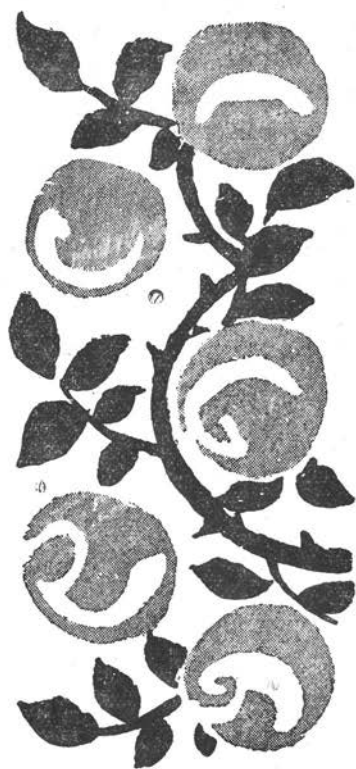
南品疊屋町周防町

東人南側

力ナメ喫茶店

柳人

永田里十九經營



かまきり

阿部閑生

秋も半ば、草の中で大きなかまきりが更に大きなはたの脇腹にむごい穴をあけて、頻りに食ひ食つてゐる、杖の先で一尺程はねさばして見たが、かまきりは噛みついた儘共にこんで離れない、食ふ程に太い腹が脈々こ波うつてます、膨らんでゆく、はたをもまだ生きてゐた。

一月の後、窓掛の裏をあるく細長いか

まきりの影が、濃く、うすく、ほんやりと伸びて夕戻つた。

亦一月の後、廂にも枯乏にも眞白に霜がおりだした、つくばひの傍、上り框の側に止つたかまきりが一つ、その朝も、この朝も、ごつとして動かずに、自分が行く自分の方へ、微かに頭を捻ぢりつけ

街に住めば(四)

高橋かほる

先月柳翁忌句會の歸りにひろし氏に聞

耽氏に私三人で大丸の横を通る自動車
の助手の様な男が兩手をひろし氏に聞
耽氏の肩へ巻きつかせて『ネー大將エ
ロ三百五十パーセントのトテモ素ばらし
ひサービスの提供ですから是非一度お越
しを』と云ひつつ附いて來たが『あかん
く』とここまでは今度また御堂の暗
がりから『ネー大將エロ……』と『も
う解つてゐるあかんく』……『じや又さ
うぞ』……それから兩氏に炭屋町でお別
れして私は思つたんですが、大阪のまん
中で此の宣傳……今年出來た私の長男が
世になつた大阪はきない變るやろ……
は面白なつて、おいでたな。

モダン徒然草

尾崎海洋人

(一)

トンボの様な文章を並べて見たが淺ましい人間であるから何を言ひ出すか解らない。

(二)

モダン彼女が餘り紅を長いこゝ眺めて居るので、フト覗き込んだら、鼻の穴を眞赤にして居るので『ドウしたい?』と問へば黙つて大きい／＼團子に作り上げた鼻汁の結晶を差し出した。女なんて皆此んなもんさ……こは彼の言葉……

(三)

太陽の黒點觀測の爲屋上に集まる新米の先生レンズを盛んに廻して居るが生徒に仲々見せて呉れぬ、誰か『先生のニキビ觀測して見なはれ』は俗感。(五・國勢調査の日)

時勢の姿

橘 豆佛

或る村の小學校に四五羽の鳩が飼はれてゐた。彼女の世界に堅苦しい修身の講話もなく厄介な算術の試験もなかつた。毎日超然として校舎の棟に戀を囁いてゐればよかつたのだ。

或る日の事、野球と言ふ面白い遊びを夢にも知らない生徒某、鳩の巢の丸い穴を覗つてハッシさばかり小石を投げ込んだ不意の襲撃に飛び立つた鳩の數に不足はなかつたが、彼は教員室に一時間立たされた上、校長さんから動物愛護の精神について懇々説諭された。

此の間約二十年経過

何代目かの鳩が今も尚住んでゐるこの事だ。教室の窓を糞で汚す事に變りはないが石を投げて校長さんに叱られる様なおろか者はもう一人も居ないらしい。だが併し……宿直の夜を鳩の看で一杯召上る教員様がいらつしやるさうだ。(昭和五年十月二日稿)

肥へる

水谷 鮎美

このごろはほんごに肥えた。痩せ形の君があまり肥えすぎるころろりとお陀佛になるかも知れない惡友たち

縁起でもない事を云ふ。

可成り尊敬してゐる人達までが肥えられて結構だとは言つてくれないうで惡友たちにあひづちをうつので急に心配になり出し朝ひる夜、鏡を見ては死相のあらはれぬこを念ひながらお酒をのみます酔へば變態もなく寝る。なーんだい。

ある雨の晝ごうしてそんなに肥えられた結構々々聞いてくれるこの遠來の友をなつかしみながら獨り肥えられる虎の巻しよつちゆう安眠すること

親孝行すること
を秘傳して好い友をうなづかせた。

十五貫以上を友に笑はれる 鮎美

復活

關本 雅幽

秋よ、秋よ、もつ／＼晴れてやれ村の祭りの太鼓がひびく。都會は千九百三十年式の秋の色を染め出した。

小鳥は木の實を啄む。馬は嘶く。

友人某は此の秋も堂島の空を颯んで居る

秋よ、秋よ、高く高く澄んでやれ。

米や物貨の暴落も。株主總會の頭痛。失業者の渦巻き。若人のハートの温度。等々。

川柳人の耳へ眼へ秋よ、秋よ高く青く澄んでやれ。

秋は己れの物だと言ふのは誰れだい。

成る程石の地蔵は男前を上げて居る。

よし、己れは千九百三十年式の地蔵になつて向ふを張つてやらう。(五二〇、四)

時勢は移る

越中今雨

女性が小性の支配下にある、それは夜明け前のことだ——そして女性が古い法城を捨てて新しき道程に上つた時、

男性の視覚にはそれは驚異を映じた——

男性がもがけばもがく程女性性は鋭角的に進んで行くのだ——

川柳も然りだ、革新だ、中間だ、

既成ださわめいてゐる中に本来の川柳を見失つた——そして慌て出した——が果してそこに何か残されたか醜い争鬭の残骸あるのみだつた——

悲しいことだ、あまりにも悲しい事實だつた——

× × ×

體験から生れる川柳、新興、傳統を問はず川柳を愛する者にこつては新興、傳統の差こそあれ川柳を愛する意味においては何等變りはないであらう——さくさくも斷言しられるやうな氣がする。

× × ×

川柳を争鬭の具にして争つてゐる中に時代から取残されそして固定された教にもぐり込んでしまつた。時勢の推移に氣付いて朝寢の旭Hのやうに慌て出した。

× × ×

凡ての川柳家は目覺めつゝある。過去

の歪曲されたる姿態より苦惱の驗を得つゝ反撥しつゝある。それが正しきものへの争鬭なのだ、正しき川柳への認識を得んがための争鬭なら一塵首肯出来るが我田引水の争鬭から見る醜さだから川柳のために悲しむものである。

川柳も結局は川柳家の自覺の下に向上せられる以上何時までも内輪喧嘩でもあるまい。時勢は移るのだ何時までも醜き争鬭をつゞけんか——胚胎せる川柳はその花も見ずしてやがて社會から没却される事は叫びかである。

川柳家の自覺こそ唯一の社會進出への道程である、川柳の向上それはよりよき川柳を生むことでもある。

× × ×

木枯やあこで芽をふけ川柳何時芽がふくのやら近いやうで遠いは今の柳界である。(1930.9.25夜)

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

サラリーマンロード

楊井二南

梅田の阪急ビルから淀屋橋の美津屋ビルまでが私の云ふサラリーマンロードであります。事程左様にサラリーマンの交通頻繁な此の道を私が通ひ初めてから既に一年半を経過しました。

カフエーミ雑貨屋がうんごあります。大は『美人座』てふ華々しいところから小は一人しか入れない酒場もあります。ジャズの流れ、サービスマンの嬌聲、夫等が此のサラリーマンロードに轉り出て背廣姿を誘惑します。洋品店のシヨウウィンドは何も云つてもサラリーマンの憧れであります。此頃では國産品のローブライスが彼等並びに私の心にアグリーする様であります。

宣傳は妙に橋の附近で流行るものであります。大抵はピラでありますが時々マツチを呉れる向きもあります。サラリーマンは實に得手勝手なものであります。大抵のム

ラは數歩の中に棄てられます。ひびのいなるさ貰ふなり握りつぶす連中もあります。爲にサラリーマンロードは常に紙屑が堆積してゐます。併しピラも配る人はその紙屑の中に立ちながら尚健闘を續けること。ロホット人形に異りません。マツチを呉れるのは大抵美しい御婦人であります。私は未だ嘗てそのマツチをさへ棄て、行く勇敢なサラリーマンを見つけたことがありません。その代りマツチを貰ふ爲に暫時立止してゐる有閑サラリーマンを屢々見受けました。實にサラリーマンは得手勝手なものであります。

バスに就いて滑稽な話があります。或朝のラッシュアワーでありました。阪急前ですし話になつたバスは例の名物巡査の機械的アクトに依つて發車しました。サラリーマンロードを眞直ぐ快速力で走りました。見る／＼新道をバスレ堂ビル前をパスします。されど／＼一次は……

であります。お報らせがないと止めずに参ります。こか『電車オーライ』こか『次バス』てな例のリズミカルな聲が聞え

ません。バスは黙々としてノーストツプです。市廳前で始めて運轉手君が『ハテナ』と首を傾けました。勿、驚、彼の最も親愛なる婦人の影も形も見えないではありませんか。彼はあわてゝ車を停めました。而も此の行衛不明のお嬢さんは次のバスからバセき切つて飛んで來ました。喜劇の幕はそれで閉ぢました。この勇敢な運轉手君も無邪氣な車掌さんは啞然たるサラリーメンをはつたらかして腹をかゝへて笑ひ合ひました。それから忘れられたる彼女はいひこもハツキリ『オーライ』と叫んだのであります。

川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋が出来ました。左の價格でお頒ち致します。此用箋を御使用下さい。

百枚 一冊 價金拾參錢

(送料共)

◇御申込は本社事務所宛

(一錢切手代用可)

支部の聲

金澤より

越中 今雨(金澤)

銀波樓 久流美の兩先輩を擁しての金澤柳壇は平穩無事である。本年の金澤川柳界の收穫は何と云つても日報柳壇(久流美選) 北毎柳壇(桂選)の二柳壇の設けられたことである。それ以前から北柳壇(銀波樓選)の三者三様で、各々が個性をはつきり見せてゐるのも面白いコントラスである。モウ一ツ健吟家岡田白雨君の生れたこともお知らせする。

御旅支部から

櫻井 圓角

昭和五年の秋も終らんとにや、秋風冷く一段と内省せしむるもの強き秋、當支部は創立第二年を送らむとして居る。初回以來の路鳥飛佐志の人生觀を聞く事越々近頃心細きに反し、新人靈堂の所謂ロマンチスト句風、支部會の内外を吹き廻り、一脈の暖さを帯びて來るべき昭和六年を期待せしむるものあり習々も其の沈黙の殻を破らんか、氏一流の沈着する人生、社會觀を發表すべく、みつるの春の若葉にも似たるヤングささコントラストの妙を成さむ。翠夢亦其の感覺詩人的の獨壇上に衆を壓するものあらむ。多耶の複雑深刻なる社會觀は更に磨きかゝらむか。メンバ―は妙なけれども石の上にも三年の譬、昭和

六年に於ける本支部の川柳生命の躍動は旺盛なるものあらむ乎。

小松支部から

上野 錦水

小松支部は本春の大火で、一時川柳雜誌々上から其の存在を消失するに共に、芦城川柳社も小松吟社と分裂し、一時其の成行を注視せられましたが、今般支部復活と同時に兩社合併し、此處に圓滿に川柳斯道に勵むことになりました。先づ一―目出度しとするところ

幹事を交替して

別府支部 木村 晃卓

三猿堂氏が商事多忙のため、今回私が幹事を交替する事になりました。生活苦戦上の私が殊に病弱の身を提げて、果して君の後送が路めるかどうか？、時は病上りの秋一層の努力を覺悟せねばならぬ。つれても近作柳櫓の籍を難れる事はなつかしき古郷を去るの思ひでほろりつとなる。先輩同好諸兄姉の御後援を乞ふや切。

神戸支部便り

楊井 二南

毎月一回例會と同人會を開いてゐる。例會は四宮神社や八宮神社の開靜な會場を選ぶこととしてゐる。參會者は二、三十人平均、大阪から熱心に出席して下さる方のあるのが嬉しい。同人會は毎回支部で開く。全同人の揃ふのは力強い。支部は絃歌さんざめく花街。批評吟の激論を戦はして夜の更けるのを

四〇

知らない。支部の仕事は分業制。企劃及會計係は二南。順備及整理係は華水、畔曉。後者は同人が交代して當る。句會の當番は毎月同人會で決定する。

支部同人消息

二南 紐育ナショナルリナー銀行大阪支店に勤務

明珠 川崎造船所製圖課に勤務

春秋 同じく庶務課に勤務

華水 大阪商大卒業後、後良口物色中、山の研究に没頭

千球 大阪福德生命保險會社に勤務、野球の選手

畔曉 神港商學卒業後病を得て靜養中

鬼笑太 少壯有爲作句研究中、自家營業に従事

竹風

神戸市電氣局に勤務

前號の正誤

誰やらが眩まながら軒を行く 公二

一路集「涙」

盛菱の涙を母はふいてやり 夕鐘

五九頁

若夫人花にたこへて雜誌にゐる 鬼笑太

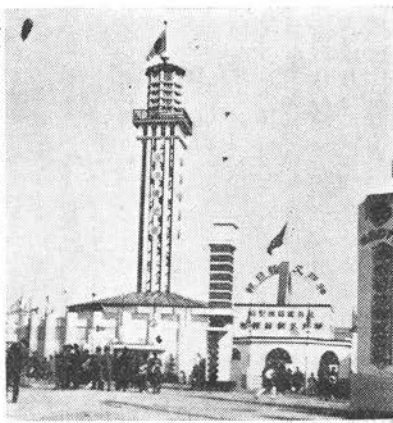
五四頁

(佳)いゝ夜だが病院の窓硝子 清公子

二五頁

負を得る力があつてのゑくほなり 華水

同裸あき英陽公靈緑愚豆清石町黙鮎路陽鶴白裸か町同同墨同陽同
人き郎紀亭二壺雨陀秋光竹選二平美耶亭峯子人二る二水亭



履いてゐた高下駄までも忘れず
高下駄と靴をきちんと揃へられ
高下駄の藝妓發車へよろめけり
(轉)高下駄をあはれがつて別れ來
(同)よれよれの袴の下の高下駄よ
同路郎

川柳 天王寺支部例會(大阪)

十一月九日於内藤製作所 須崎豆秋報

席題 モデル・社交 互選

今脱いだモデルへきつい陽があたり
貸借に社交のうまい未亡人
寒かるとモデルの母は案じてる
社交に次の日曜もあてゝあり
モデルになつて孝行をする
社交家のうちでは飯を食はぬなり
カーテンを引でモデルは脱ぎ初め
貴婦人は社交とやらの馬に乗り
アトリエの午後モデルの疲れ
其の出世やつぱり話上手から
雨町選
赤いこと云つてあいつは穢になり
窓の風小鉢の赤い花が揺られ
醉眼もうろう赤前垂がしなだれる
唇關へ赤いスリッパならべられ
唇の眞赤にたゞれてる戀
愛人の頬の赤さを忘れかれ
緑雨選
素顔に來たわと年増素顔なり
河内屋の素顔が長い戎橋
色街を素顔さつさと通り抜け
素顔を思ひ出して居る現像室
豆秋
雨町選
海洋人

遠慮しい素顔ではいて來
家出して役者の素顔見てもぞり
素顔から黒子見付けるプロマイド
封切りの舞臺へ並び立つ素顔
女給の素顔庭掃いてゐる
素顔にすればざらにある顔
同琴人
二人

二人

共稼ぎ妻も晩酔いけるなり
お地蔵を拜む二人の袖をぼつ
珠數花のま赤な土手に吾子二人
身の上を慰さめ合ふてゐる二人
カフエーの晝を女給と二人きり
二人連れさとの悪い友に逢ひ
一組は月を見えあるダンス場
水兵のうれしそなる二人連れ
タグシーが二人へ心よく揺れる
親一人子一人別な國で住み
(人)寒きベンチを二人スツと立ち
(地)云ふ事もなく二人きり淋々
(天)二人には焦げた飯でも面白し
(轉)幸福は出雲の宿で妻と書き

同琴人

共稼ぎ妻も晩酔いけるなり
お地蔵を拜む二人の袖をぼつ
珠數花のま赤な土手に吾子二人
身の上を慰さめ合ふてゐる二人
カフエーの晝を女給と二人きり
二人連れさとの悪い友に逢ひ
一組は月を見えあるダンス場
水兵のうれしそなる二人連れ
タグシーが二人へ心よく揺れる
親一人子一人別な國で住み
(人)寒きベンチを二人スツと立ち
(地)云ふ事もなく二人きり淋々
(天)二人には焦げた飯でも面白し
(轉)幸福は出雲の宿で妻と書き

同琴人

共稼ぎ妻も晩酔いけるなり
お地蔵を拜む二人の袖をぼつ
珠數花のま赤な土手に吾子二人
身の上を慰さめ合ふてゐる二人
カフエーの晝を女給と二人きり
二人連れさとの悪い友に逢ひ
一組は月を見えあるダンス場
水兵のうれしそなる二人連れ
タグシーが二人へ心よく揺れる
親一人子一人別な國で住み
(人)寒きベンチを二人スツと立ち
(地)云ふ事もなく二人きり淋々
(天)二人には焦げた飯でも面白し
(轉)幸福は出雲の宿で妻と書き

同琴人

川柳雜誌社 十月例會(大阪)

十月十七日 京都吟行 朝田新水報

互選

橋本の屋根を急行見て通り
襟足に見せてやつぱりそれ者です
亡き母の思出がある五條橋
蜘蛛の巣が擬寶珠に張つて五條橋
仲居今日亭主に逢ふた五條橋
新水

同琴人

コストミン五條の橋で二度もくれ
同

くらうとに墓を問はれた鳥邊山
かほろ

鳥邊山 香の煙に空は晴れ
新水

傳兵衛の墓を見逃がし鳥邊山
里十九

新高雄 新婚らしい二人連
里十九

山門の隅に人呼ぶ易を立て
新水

清水の舞臺にサイレン遠く聞き
あきら

背景にまでも藝者は氣をくばり
新水

折れさうな格子鏡臺並んでゐ
新水

醉ふたのが幹事になつた先斗町
あきら

先斗町煙草の刺銭を取り損ね
新水

おしることを喰べる女のはしやげる
あきら

石段へ來て生酔の帯がとけ
新水

稚兒ヶ池仰げば天文臺と知り
同

川柳 梅田支部例會(大阪)

十一月四日 永田里十九報

兼題 築山 かほろ選

築山に昔を偲ぶ石があり
ト屋

雨蛙この築山の蠅をとり
鮎美

築山へまた綱帶の優しい手
新水

身代と別に築山へ父の趣味
あきら

築山にこんな立札立てゝあり
夕鐘

孫にひかれ築山へ行く
里十九

築山も旗提灯でかざりたて
(人)築山に猫のあるいた雪の朝
(地)築山へ登かくれてしまふなり
(天)築山の灯が築山を照すなり

兼題 青 疊

同 石 竹
観 月 美 鐘

青疊さちんと座る男の子
腰張をはりかへさせる青疊

兼題 青 疊

同 石 竹
観 月 美 鐘

惚れきつた眼をうつむいて
青疊すぐ女房の事を青疊

兼題 青 疊

同 石 竹
観 月 美 鐘

本箱はごこへ置こうか青疊
青疊ごこやち寒い風が来る

兼題 青 疊

同 石 竹
観 月 美 鐘

珍客を置きざりにして青疊
よるこびの日の待遠し青疊

兼題 青 疊

同 石 竹
観 月 美 鐘

(人)青疊日記へうれしい事ばかり
(地)青疊一へんお客するつもり

兼題 青 疊

同 石 竹
観 月 美 鐘

(天)青疊窓をあければ梅咲いて
(軸)花生けの水がこぼれた青疊

兼題 青 疊

同 石 竹
観 月 美 鐘

弟は涙で文字を書いて居り
涙もろき母の手の手

兼題 青 疊

同 石 竹
観 月 美 鐘

泣きやめと云ふ兄様も涙ぐみ
薄墨の字がかさなりて破りぬる

兼題 青 疊

同 石 竹
観 月 美 鐘

見ぜまいとする涙に座をはづし
棧橋にうれし涙の母がいる

兼題 青 疊

同 石 竹
観 月 美 鐘

(人)思人へ涙ながらの物語り
(地)思中誰はばかち涙を見

兼題 青 疊

同 石 竹
観 月 美 鐘

(天)所作事の涙は墨と變るなり
(軸)うつたへる女の涙はかきり

兼題 青 疊

同 石 竹
観 月 美 鐘

兼題 夜 業

観 月 選

飯食はず夜業の父をまつてゐる
惚れてゐる女夜業の窓へ立ち
あす夜業首の白粉のばしてゐ
休息の夜業にごこか火事らしい
あぶらちんだ顔が夜業の灯に寫り
夜業また夜泣きの鈴を奏うき
誘惑に勝つて夜業のはかどら
息白き夜業を終へて連れて出る
髭のびたまゝに夜業の給料日
夜業の灯彼の女の事で笑ひ合ひ
(軸)夜業から戻つて酒の粕を焼き

兼題 夢

石 竹

夢で見る父母の笑顔も旅の空
どうしてもかくれる事が出来ぬ夢
忘れた戀が夢にゆれてゐる
蟹の泡ぶつゝ夢のふくれぬる
しかられて寝た子が恐い夢におき
(人)さりさめもない夢が日が続き
(地)紅蓮も剪る夢夜は明けそむる
(天)美しき夢にさめたる朝の水
(軸)忍びなく妻と獄屋の夢が醒む

兼題 夢

石 竹

寫真機を出す友達が待たずなり
寫真機を向けてやゝこを笑はせる
寫真機へ今あの雲がちぎれたり
寫真機へ蜻蛉も寫る秋の戀
新婚はともかく寫真機提げて出る
(佳)寫真機をむける倍の日向ほこ
(同)寫真機へ啞の手真似の手ぶき
(同)まゆ墨を直しカメラの中に入る

兼題 夢

石 竹

寫真機を出す友達が待たずなり
寫真機を向けてやゝこを笑はせる
寫真機へ今あの雲がちぎれたり
寫真機へ蜻蛉も寫る秋の戀
新婚はともかく寫真機提げて出る
(佳)寫真機をむける倍の日向ほこ
(同)寫真機へ啞の手真似の手ぶき
(同)まゆ墨を直しカメラの中に入る

兼題 夢

石 竹

寫真機を出す友達が待たずなり
寫真機を向けてやゝこを笑はせる
寫真機へ今あの雲がちぎれたり
寫真機へ蜻蛉も寫る秋の戀
新婚はともかく寫真機提げて出る
(佳)寫真機をむける倍の日向ほこ
(同)寫真機へ啞の手真似の手ぶき
(同)まゆ墨を直しカメラの中に入る

兼題 夢

石 竹

寫真機を出す友達が待たずなり
寫真機を向けてやゝこを笑はせる
寫真機へ今あの雲がちぎれたり
寫真機へ蜻蛉も寫る秋の戀
新婚はともかく寫真機提げて出る
(佳)寫真機をむける倍の日向ほこ
(同)寫真機へ啞の手真似の手ぶき
(同)まゆ墨を直しカメラの中に入る

兼題 夢

石 竹

寫真機を出す友達が待たずなり
寫真機を向けてやゝこを笑はせる
寫真機へ今あの雲がちぎれたり
寫真機へ蜻蛉も寫る秋の戀
新婚はともかく寫真機提げて出る
(佳)寫真機をむける倍の日向ほこ
(同)寫真機へ啞の手真似の手ぶき
(同)まゆ墨を直しカメラの中に入る

兼題 夢

石 竹

寫真機を出す友達が待たずなり
寫真機を向けてやゝこを笑はせる
寫真機へ今あの雲がちぎれたり
寫真機へ蜻蛉も寫る秋の戀
新婚はともかく寫真機提げて出る
(佳)寫真機をむける倍の日向ほこ
(同)寫真機へ啞の手真似の手ぶき
(同)まゆ墨を直しカメラの中に入る

兼題 夢

石 竹

寫真機を出す友達が待たずなり
寫真機を向けてやゝこを笑はせる
寫真機へ今あの雲がちぎれたり
寫真機へ蜻蛉も寫る秋の戀
新婚はともかく寫真機提げて出る
(佳)寫真機をむける倍の日向ほこ
(同)寫真機へ啞の手真似の手ぶき
(同)まゆ墨を直しカメラの中に入る

兼題 夢

石 竹

寫真機を出す友達が待たずなり
寫真機を向けてやゝこを笑はせる
寫真機へ今あの雲がちぎれたり
寫真機へ蜻蛉も寫る秋の戀
新婚はともかく寫真機提げて出る
(佳)寫真機をむける倍の日向ほこ
(同)寫真機へ啞の手真似の手ぶき
(同)まゆ墨を直しカメラの中に入る

兼題 夢

石 竹

寫真機を出す友達が待たずなり
寫真機を向けてやゝこを笑はせる
寫真機へ今あの雲がちぎれたり
寫真機へ蜻蛉も寫る秋の戀
新婚はともかく寫真機提げて出る
(佳)寫真機をむける倍の日向ほこ
(同)寫真機へ啞の手真似の手ぶき
(同)まゆ墨を直しカメラの中に入る

兼題 夢

石 竹

行きよする裾のもつれも冬となり
冬の朝元氣な兄の腕時計
冬の朝茶碗の温味なせてゐる
冬の朝畑に父の白い息
カーバもトビももあるよ冬よ来い
炬燵から今日の寒さをきいてゐる
冬の朝雑誌の表紙折れてゐる
郊外の冬行商の背が高し
荷車を終ふ音にも冬を知り

兼題 夢

石 竹

時、十月十九日(日曜日)野口曉記
秋晴の今日、同人明珠、竹風、華水それに、
翠石及び明珠さんのお子達と私合せて六人
十時に中の島停留所に集合、十時半に海濱博
の第一會場へ、乗り込みました。

兼題 夢

石 竹

サイレンが鳴ると魚雷へ走りされ
わけもなく沈んだ船が浮き上り
電氣館提灯の底極め合ひ
増す人波が氣球空に晴れ
人間を打つ大砲に背い空
親も子もサークランに酔される
ロボットの出す廣告もとされがち
ベンチベンチ埃にあいた顔と顔
附記、當日一行の他に、番翁氏及び大阪の琴
人氏夫妻も博覽會見物をされ句會へ出席さ
れました。

兼題 夢

石 竹

時、十月十九日(日曜日)野口曉記
秋晴の今日、同人明珠、竹風、華水それに、
翠石及び明珠さんのお子達と私合せて六人
十時に中の島停留所に集合、十時半に海濱博
の第一會場へ、乗り込みました。

兼題 夢

石 竹

サイレンが鳴ると魚雷へ走りされ
わけもなく沈んだ船が浮き上り
電氣館提灯の底極め合ひ
増す人波が氣球空に晴れ
人間を打つ大砲に背い空
親も子もサークランに酔される
ロボットの出す廣告もとされがち
ベンチベンチ埃にあいた顔と顔
附記、當日一行の他に、番翁氏及び大阪の琴
人氏夫妻も博覽會見物をされ句會へ出席さ
れました。

兼題 夢

石 竹

時、十月十九日(日曜日)野口曉記
秋晴の今日、同人明珠、竹風、華水それに、
翠石及び明珠さんのお子達と私合せて六人
十時に中の島停留所に集合、十時半に海濱博
の第一會場へ、乗り込みました。

兼題 夢

石 竹

サイレンが鳴ると魚雷へ走りされ
わけもなく沈んだ船が浮き上り
電氣館提灯の底極め合ひ
増す人波が氣球空に晴れ
人間を打つ大砲に背い空
親も子もサークランに酔される
ロボットの出す廣告もとされがち
ベンチベンチ埃にあいた顔と顔
附記、當日一行の他に、番翁氏及び大阪の琴
人氏夫妻も博覽會見物をされ句會へ出席さ
れました。

兼題 夢

石 竹

時、十月十九日(日曜日)野口曉記
秋晴の今日、同人明珠、竹風、華水それに、
翠石及び明珠さんのお子達と私合せて六人
十時に中の島停留所に集合、十時半に海濱博
の第一會場へ、乗り込みました。

兼題 夢

石 竹

サイレンが鳴ると魚雷へ走りされ
わけもなく沈んだ船が浮き上り
電氣館提灯の底極め合ひ
増す人波が氣球空に晴れ
人間を打つ大砲に背い空
親も子もサークランに酔される
ロボットの出す廣告もとされがち
ベンチベンチ埃にあいた顔と顔
附記、當日一行の他に、番翁氏及び大阪の琴
人氏夫妻も博覽會見物をされ句會へ出席さ
れました。

兼題 夢

石 竹

時、十月十九日(日曜日)野口曉記
秋晴の今日、同人明珠、竹風、華水それに、
翠石及び明珠さんのお子達と私合せて六人
十時に中の島停留所に集合、十時半に海濱博
の第一會場へ、乗り込みました。

兼題 夢

石 竹

サイレンが鳴ると魚雷へ走りされ
わけもなく沈んだ船が浮き上り
電氣館提灯の底極め合ひ
増す人波が氣球空に晴れ
人間を打つ大砲に背い空
親も子もサークランに酔される
ロボットの出す廣告もとされがち
ベンチベンチ埃にあいた顔と顔
附記、當日一行の他に、番翁氏及び大阪の琴
人氏夫妻も博覽會見物をされ句會へ出席さ
れました。

兼題 夢

石 竹

加柳維誌社 耽柳會例会 (兵庫)
十月六日 於 光穂居 山本洛湯報

席題 雜 市

雜市は借ると決めてる二階借
女の子も雑巾は縫へるなり
黙つて拭く本堂に映る顔
本堂を拭き死んだ母の事
憂鬱を雑巾にかけてチトなら
雑巾に二度の勤めを強いられる
明日から雑巾が要る二年生

餅をやく火鉢のふちの賑やかさ
子澤山餅やく母をあせらせる
焼餅屋寄宿の門を出た所
風呂敷
風呂敷に包んで居ても南瓜なり
風呂敷を背負ふて歩く小商ひ
風呂敷の端の字が女文字なり
風呂敷に嫁の定紋染め援かれ

結び立ての髪が氣になり紺蛇の目
光線が強い病後の絹布圍
紡績へ通ひけなげな母で生き
(人)人絹の皺が目立つ雨續き
(地)儉約を示す社長は綿の服
(天)紺絹米の値知らぬ歩き振り
席題 吐 息
長火鉢吐息も仇な頭痛膏
失業の吐息も知らず子は肥り
(秀)洩らしてはならぬ吐息を見給
(同)針先も草臥れた岩田帶
(同)不圖母の吐息を聞くと失業苦

川柳雜誌社 耽柳會例會 (兵庫)
加古川支部

九月九日 山本洛湯報

席題 惣 領

惣領は内氣で本を讀むばかり
義理文けに惣領大事にされてゐる
保護願ひされた惣領連れ子なり
惣領はユツクリ畔を戻つて來
惣領が相談に乗る年になり

喰べ足らぬ内に栗飯すんじまい
栗飯が最う炊けて居る山を降り
栗飯へ今日は家内の皆揃ひ
栗飯へ未だ酔ひ足らぬ猪口を伏せ
エブロンの下から配る栗御飯
栗飯の味を覺えた出養生
栗飯が此處まで匂ふ好い日和
栗飯の釜に残るは母の日の
栗飾をあつて載く子守唄
(秀)栗飯に秋一日と深められ
(同)栗飯にするには手籠まだ軽い

思ひ出し笑ひに獨酌つぎこぼし
獨酌へ女房キネマに行く用意
獨酌へ近所が呉れた棚をあけ
獨酌へひよつこり妻がもどつて來
獨酌へ向ひの女笑ひかけ
(佳)獨つて寝した妻に亭主獨り呑み
(同)獨酌(フット)い智恵が浮かん來
(同)小使の我身になつて酒にする

川柳雜誌社 鶴町支部句會 (大阪)

關本雅幽報

座布團

座布團をよせて高野の話なり
座布團に猫が寝て居る良いくらし
女の子も座布團を貰ふて居る
座布團を枕に友は寝てしまひ
福引の中座布團派手に積み
座布團も呉れて最後の意見なり

椽側の陽に紙屑と子が久し
結納を受けてそれから日本醫
總代に出た紋付に見る折目
綻びを縫はせて朝を輕う出る

冷飯を食つて一番汽車で立ち
冷飯へ煮たてたお茶の香が強い
すき腹へ冷飯底の音を立て
(秀)冷飯をわけ合つてある睦じさ
(同)妻を亡くして冷飯の味に馴れ
(同)冷飯を喰ふ内職の手くらがり
(同)冷飯の不服も言つて暇を取り
(同)丁稚ふと冷飯を食ふ日を數へ

金澤川柳會例會 (金澤)

於北國新聞社樓上 越中今雨報

兼題 箸

銀砂子 選

叱られて箸はしんみり下におき 冬 青
へだてない心になつて箸を 割り 粗 影
赤い箸袋東なくも手に持たし 木偶人
(軸) カチヤ〜 鳴る箸袋 自己意識 銀砂子

席題 水

柳二郎 選

水屋の儲けたらしい音になり 木偶人
水屋が涼しい 夜を行く 冬 青
氷簾の重さに生きて 死を怖れ 粗 影
しんげんの顔を見た氷屋 粗 影
運ばれた氷へ坐りかへてゐる 今 雨
(軸) 水屋のこんな早う秋になり 柳二郎

席題 川

残 月 選

澄み切つた心になつて川を見る 白 雨
笛の音のふるへて川の向ふ岸 柳二郎
しんみりと河鹿聞いてる束ね 粗 影
川巾へ自信あるかの身をさばせ 伊 喜 智
川へ来て浴衣が軽い風になり 今 雨
川一ツ越えれば我が家が 在 所 木偶人
(秀) 砂利上げの音とせせらぎ 冬 青

席題 雑 吟

めかく子 選

一人きりある淋しさに橋え来る 柳二郎
失職の瞳へ木の葉の流れ 冬 青
便箋をそよぐ風あり灯取虫 木偶人
朝の街だん〜 影を縮め行き 今 雨
クレープのシャツに滲んだ生活苦 銀砂子
御用聞き晝寝の足の裏が見え 同
(軸) 煙の行方も 緩な晝めかく子

川柳 梅田支部句會 (大阪)

水谷 鮎 美 報

兼題 宵

かほる 選

今宵うれしく色め かげれ 石 竹
宵のどこからか子 守 唄
宵のげん 案外樂な客が来る ト 居
見臺をやたらにた〜く宵の口 里 十 九
宵のうち待人なんぞやつてゐる 同
まだ宵の藝者眞面目に唄ふなり 鮎 美
(人) 宵を歩けば落葉の音が ト 居
(地) 子をつれて宵を出てゆく久ら 鮎 美
(天) 宵の雨ときれいにあきらめ 同
(軸) 宵の口父は眼鏡を取りにやり かほる

封を切る忠兵衛足が地につかず 新 水
うす暗い部屋で小判をよむ 寒さ 夕 鐘
さんぼうへんせの小判のよく光り 觀 月
(人) 掌へせた小判の光りかな 鮎 美
(地) 獨言云ふて小判へお辭儀する 同 月
(天) 見せるだけ見せ小判はしまはる 里 十 九
(軸) 重寶なものに小判は出来上り 新 水

すがたきそこが年増のれうち也 選
小柳の帯へ年増は粹を見せ 里 十 九
若い妓と離る年増へ河鹿なく 夕 鐘
一升をのんで見ると云ふ年増 ト 居
満洲の話をしてる年増なり 觀 月
圓タケをおんで年増の行くも 同
停電に年増の酒落がつづく也 鮎 美
(人) おもしろく年増の揃ふ温習會 同

里 十 九

同

同

同

(地) 相合傘年増笑ふて通りすぎ まさる
(天) 買物をすつぱりしたる年増也 夕 鏡
(軸) 獨吟に年増の膝は向き直り かほる

川柳 加古川支部句會 (兵庫縣)

水田 光 穂 報

十一月五日夜、泰山、美也光 兩君のなつかしい聲帯が狭い室の空氣をふるはす 一時間 餘りで退參の常習犯洛陽君の眼鏡が殖えて、賑かなこと、今頃弟篤男は朝鮮で明日の試験 課目で頭が一杯だらうと思つた。

席題 懷る手
懷る手してゐる小僧を 叱りつけ 美也光
餘念ない裁縫へ 呼ぶ 懷る手 泰 山
秀才は役に 立たず 懷る手 同
沈黙のフト顔 上げし 懷る手 洛 陽
懷る手食つてゆけるのを おかしがり 同
利子で食ふ身分であらず 懷る手 光 穂
十月廿日席題 野 球

本壘打歡呼は枯れた空へ 鳴り 篤 男
フアーストで又殺された走りやう 洛 陽
補回戰 群衆の手も 油汗 光 穂
ホームラン それから 投手肩を張り 同
手にバット持つた男で有つては 泰 山
十萬の目は一つなり ホームラン 同
打つだけが判るフアンも 混つてゐ 同
頑迷な觀客も 野球話し出し 同
テナウンスー 野球放送に聲が 美也光
野球選手親父の自慢の一つなり 同
雪辱戰敵の中に友が あり 同

同

同

同

同

同

盛装の殊更目立つ簪にらみ
口程に物を云ふ目の流行妓
母親の細くした目を見逃さず
目を開けて按摩群衆へ耳を立て
目ぐすりや傍まで行くさ口が閉き
同 篤男

芦村翁追悼會(大阪)

十一月十五日 夜本社俱樂部於

橋本綠雨報

當夜社友同人懇談會を心齋橋食堂で催す
ことになつてゐましたが、主幹路郎先生の岳
父が兼て病氣の處、藥石の効なく十四日に長
逝され十五日佛式で葬儀を營なれました
ので、懇談會を遠慮して追悼會に變更致しま
した。

席題 無口 綠雨選

上京を無口な兄もさめてある
其當座其人の無口に落つかず
死ぬまでの無口を遺族淋しがり
黙し居る眼に悲しみの光るもの
無口者立派な髭を生して居る
妻口者大股であるく癖があり
おもしろい話しに無口お茶なくみ
秋の陽を浴て無口のすゞき物
だまつて人へ火鉢の灰がくる
無口今日名刺をたんと貰ふなり
綠口で無口は安いなさ思ひ
子を連さう見るとこのない無口
(軸)湯氣の立つこさを眺める無口
兼題 方針 山雨樓選
方針も立たず三十の歳がくる
方針は聞くだけ聞いただけのこと
里十九

方針に冷たい部屋に變るなり
方針がきまり残りの茶をよげれ
方針の違ふ盃廻される
妻と来て方針がまた變るなり
方針に火鉢のふちに寒ふる
方針の生れかわつて働く氣
色々に言はれ方針又かはり
方針を語るベンチに月が射し
方針を變へるつもりへ子が産れ
(人)方針へ薄記臺黒ふなつてある
(地)方針へ小さく座つた膝頭
(天)方針へ元氣な俣口を出し
(軸)方針へ旅の枕の高いこと
同 山雨樓

窪田而笑子翁三周忌(松山)

十月二十七日夜 伊豫鐵俱樂部樓上

追悼吟 前田五健 報

三周忌菊の薫りも親しまれ
宵月に輪のかゝつて而笑子忌
極樂で今日何號の媛柳
白菊を淋しくさせる雨がふり
佛から叱られさうな顔が寄り
三周忌矢張りつめたい秋の雨
命日をフト思ひ出す柿の色
秋淋し而笑子忌の灯と煙
同 夢郷

松山媛耐笑子忌川柳會

柳吟社 題 人情 五健選

人情がついにお金を貯めさせず
人情の裏辯識士の智恵を借り
商賈と別な人情持つて居り
同 夢郷

案外に顔とは別な人情味
人情のお方だつたと通夜同士
(人)親方も情け深いと初便り
(地)無抵抗主義へ群集齒がみすり
(天)ド底が會へば互に救ひ合ひ
(軸)きりつめた世帯人情さうさ
同 松山

淋しき暮の鐘

淋しき暮の鐘聞く嫁の里
晩鐘にぐつたり戻る共寝ざ
釣鐘の村一杯に暮れる音
鐘の音餘韻の中に大和あり
ぼんやりと鳴るが鋭き鐘は持ち
さすらひの身にハツキリと暮の鐘
夕靄へ鐘の餘韻が流れて来
二人居る二人が鐘に淋しがり
(秀)鐘の音を機會に立つた長話
(同)初七日の鐘打つ膝に子は眠り
(同)打明けて別れを惜しむ鐘
(同)鐘の音京阪丸に夜が迫る
(同)虹の輪を突きぬけて來る鐘
(人)校庭の喧嘩聲へて居る鐘
(地)合掌の背に出しおの鐘鳴
(天)沈む陽を追つてる如く鐘鳴
(軸)失業苦鐘のリズムの身しみる
同 大

三味線

三味線にむかづいて居る失業苦
師匠フト三味を習ふた事を悔ひ
三味線をつづけば疊む花蓮
隠し藝三味イ加減に合はしとき
稽古三味一層夏を暑がらせ
(軸)爪弾を聞く方が持つ妻楊枝
同 喜峰

コスモス、心願 互

空き家とは知らずコスモス咲、誇、
小説に飽いてコスモス見詰めて居
コスモスの下から覗く隠れん坊
コスモスの縄張り覗く雨の晴れ
コスモスが失業の身をイラタ、セ
コスモスに似て軽薄な女なり
本尊に笑はれさうな願をかけ
辻占の心願みんな泣ふなり
心願の禁酒をみんな淋しがり
心願の冷たい朝の水を汲み
心願の女事務員老けて行き
心願が成つて夫婦で上げる旗
心願へハッキリ映る常夜灯
笑ふのへ心願例を数へ立て

二南居研句會

川柳雑誌社神戸支部報

題 プロマイド

プロマイド親のしらないとこへお、
プロマイド自慢の出来る数になり
小遣をれたつた頃のプロマイド

題 口論

口論へかまはず母の膳を出し
口論のあとの火鉢のすいがら
口論の相手突然笑ひ出し
口論の中へ集金氣を出し
言ふことをみんな言ふ氣の妻に
(軸)口論の始めを課長聞いてやり

春 選 峰 松 雙 葉 花之助 拓水 夢郷 碌々 素泉 紫石 武子 大夢 大郷 同 健

題 賣出し 紋 太選

賣出しへ巡查をつけない目で通り
賣出しに丁稚目のつくさこにある
賣出しのそこにもピラが捨て、
賣出しの角を曲れば風があり
(人)賣出しをよく知つて女たち
(地)賣出しの聲ばかりの店を出
(天)賣出しへ風邪のからだを

題 近道 合

近道を來たいひわけに間に合はず
よい口があつて近道歸つて來
悪友が感心をする 近い道
近道の水溜りなご寒い朝
近道を二人足音つゞくなり
近道をすれば踏切番

題 水兵 二南選

クインなるもの水兵へ酌んで居る
藝者たち今日を水兵さんとある
水兵の母お守りを確かめ
上陸をした水兵の靴がとけ
(佳)水兵に子供を貸してついで
(同)上陸をした水兵に旗日和
(軸)親戚のある水兵に追ひ越され

かほる居偶會 (大阪)

高橋かほる 報選

金屏風閑くさ白い紙が散り
結構な暮しと見える金屏風
畫の影ぼんやり寫る金屏風
席題 裸女 互選

風見草十月例会 (石川縣)

宮田茶撫朗報

裸女一人冷たき水で髪をすく
爪を剪る裸女へ夕陽がさしてある
裸女の後に夕刊を見てる
來會者の十二名は近ごろでの少数ではあつ
たが顔振れは選りすぐつた熱心家ばかりで
真に愉快な集會だつた。

抵當 茶撫朗選

抵當にした家の中暗いこへ
二番三番いつその家焼けちま
抵當の不足へ世辭の多いこと
泣きつかれ値打の外を貸してあり
(佳)抵當の値踏みして見る倉庫番
(軸)抵當のさはさりながら拭掃除

喜 び 山 々 選

(佳)喜びの座に泰然と交るます
(佳)喜びの二人を汽車は抱え逃
(同)村人の喜び上等兵で來る
(同)喜びが字にありて浮き見
(同)喜びは握り交した手の痛さ
(軸)捨てられた小犬喜びつきま

俄 雨 吉 祥 選

(佳)一本の傘に二人の借りた傘
(同)俄雨星なほ見ゆるさところ
(同)俄雨犬も一緒に走つて
(人)向ひから向ひへ渡る俄雨
(地)俄雨晴れて話が改まり
(天)意地悪な雨でと軒へ寄る來る
(軸)校門へ親々々の俄雨

吉 祥

小夜曲 川柳會 第二回小集 (阪急線十三)

十月廿五日 燦郎居 遠藤燦郎報

雜詠

月の出の今宵黙つて横になる
おまえも泣けてくるのか一ツ星
野良犬のやうに見知らぬ街を行く

運命

運命をうつる心のみつめある
あまりにも儚き言葉さだめとは
運命と呼ぶには餘り美しい

魅惑

メリンスに寛女悲しうすがつてゐ
君がみあしの冷めなき魅惑
同 蒼太

裸人居偶會

十一月廿五日

須崎豆秋報

流し針あげに行く子へ渡り鳥
たそがれの子の唄になる渡り鳥
渡り鳥 大阪の川光るなり
父さんの歸りが遅ひ渡り鳥
同 豆秋

川柳雜誌社 同人研句會 (兵庫)
神戸支部 揚井二南報

長男

長男は社宅にあたを知つてゐる
長男へ今日もうるさい仲人來
不器用に長男生れつてゐる
隣席にある長男をまぶしがり
納簾へ長男長い顔を見せ
鬼笑太

かほるさんにお逢ひして(明石)

十月三日午後 於明石公園茶店

酒井啞聲報

こゝ數年間かほるさんは毎月毎月歌聖人丸
神社へお詣りされてゐられます信心深い
はるさんです、これから毎月かほるさんに會
う事の出来るのを楽しみにしてゐます。

席題 不景氣、都々逸、風、セル、砂

腹巻、夢 全部五選

不景氣の事から話す久し振り 三霞

不景氣にもう切れてゐる納焼期 啞聲

不景氣を伯母に話せば餅を焼く かほる

不景氣に煙草屋つりを間違へり 同

都々逸のもう一度きくいゝ文句 同

都々逸がうまい男の白い足袋 啞聲

都々逸の聲もよつばど酔うてゐる 三霞

コスモスへ風は海から吹いてゐる かほる

尺八と合はしにセルを着て出かけ 同

張り切つたその肉体をセルに見せ 三霞

セル僅か二十日あまりを出も着る 啞聲

戀をする下駄が静かに砂を踏み 三霞

よう肥えたものと腹巻見られ 三霞

腹巻を姿を連れて買ひに來る かほる

こわかつた夢の話に朝の膳 三霞

熟睡をしてゐる様で夢ばかり 啞聲

白足袋をはいてるとこの夢がさめ かほる

對座吟 (大阪)

十月廿七日夜 熊本 黃蛾報

不案からのがれる様に夜がしらけ
込み入つた話に暮れて火を借りる
櫻果

おこらせるともりの謎であるとい
夕刊 櫻果

夕刊を賣つたお金で粥が出来
夕刊が其儘にある 定休日 櫻果

塗青柳壇會 (大阪)

十月十四日 於大阪塗料青年團事務所

冬帽 熊谷 紅報

冬帽へちさふけて見えたのとい
信念に生きた冬帽色あせて 光路

(軸)冬帽を出せば疲れた様の辭 繁馬

月を見る腰へ簾蚊の赦なく 光路

二階借月見に下を呼んでくる 木馬

いゝ月に思はず足が橋へ延び 紅選

勳章が賞品係に居るもよし 木馬

賞品をむき出しにして選手去に 光路

半紙一帖下だしをかける草角力 子元

(軸)同着へちと賞品に無理が出来 紅

ひかり集 (その二) (大阪)

水谷鮎美報

風

神木のまうへをすぎる夏の風
寒風よ吹け今日は給料日 同 居
風の音飯も食はずに待つてゐる 觀月

ひさりもの風のこゝろと寝てる
逢ひ曳きへ風吹きつけて
風ふ吹け風にながれた赤とんぼ

南海至誠川柳十月例會(大阪)

十月十三日夕 於天下茶屋會場

盲 路 耶 選

にかめくら一歩一歩死の歩み
人寄せの三味線ひきは盲なり
東西屋盲も少し聞いてゐる
盲でも知つてゐるよと叱りつけ
盲には惜しい娘を振り返り
朝風呂に運入つて盲何處へ行く
眼の見えぬ父は娘の身を案じ
盲にはサーベルの音も厳しく
樂屋口盲引かれて席につき
眼科醫を信じ盲に借があり
失明にいつしか主義者めいて来る
失明にせめても戀を夢に見ん
ハツキリと半鐘きいた盲なり
信心の棚へめくらのすり寄つて
手のひらへ盲は錢を並べたり
口惜しくも盲の足がもつれ合ひ
盲嬉しく在り金に觸れて見る
盲を取つて呉れたへ盲無愛想
盲人の耳には慣れた流行唄
盲人に足袋の白さの目立つなり
(人)腰掛けをゆすれば盲連れなり
(同)真直ぐに歩くを見れば盲なり
(同)何時までも盲になつて強さ
(地)しやがんでる盲へ地軸まわり

多同紫一同一一同一青砂耶多同貴朝紫瓢烏格狹功將
聞水杉杉杉杉砂耶聞曉山陽水山莊樓間哉路吉耶
選

(同)盲の手引くに女の憚らず
(天)勿体ないへ盲の掌を合はせ
(軸)失明に學者として名があがり
(同)盲曰く將棋もさします

寒がりの又がりたり一頁路耶

寒がりに此れ見よがしの寒稽古
貴方ほんさうに寒がりれと云ひぬ
寒がりを連れて先生走りだし
寒がりは齒痛の様な呼吸をつき
炬燵かゝへて北風をきき
寒がりの蜜柑は皮の儘にあり
寒がりのとこで寒がり火を借り
我事のやうに母親寒がつて
此上にまだ着せますかお母さん
寒がりは酒にありつき度いのなり
寒がりに又欠損のつゞくなり
寒がりは汚いところも無頓着
寒がりは口先き丈けでこき使ひ
ストブで足らず火鉢抱いてゐる
猫の子は日和のとこへやつてくる
寒がりが賽錢の音聞いて去に
寒がりが寝て喰ふ方かよいと言ひ
座蒲團を重れてまうるう居る
北風がきしりと家を出にくがり
月光を浴びて寒さに敗けてゐる
寒さから酒屋へ借りが出来てなり
寒がりはすだれを早ふ片附かせ
寒がりを中にはさんで女の子
(人)寒がりへ落ちて来そな星の数
(地)寒がりの目へ燃えそな炭俵

多同紫一同一一同一青砂耶多同貴朝紫瓢烏格狹功將
聞水杉杉杉杉砂耶聞曉山陽水山莊樓間哉路吉耶
選

(天)寒がりの眼に夕暮の船世帯
(軸)寒がりが霜をはつき見て歩き
(同)寒がりがつまみ出して黒の石

講習會一つなりさもつかんだか
一ト握り掴みなさいと豆を出し
メンナイの千鳥は袖をつかむ丈け
温い手へ冷たい手さ掴み合ひ
掴み合ひ放した方は泣いてゐる
掴まして見たい氣のするうしろ髪
失業の何んでも掴み氣ですこし
右の腕掴んで住所尋ねられ
掴かまへて歩かせてゐる父の腰
弱點を掴んでバットふかしてゐ
掴まれて見れば女の氣は弱し
掴まれてゐるのか弱い金を出し
急所を掴めやその通り

残念さくちで言へない義理があり
残念ななせあれ丈けが言へなんだ
残念と一手は泣いてかへつて来
遠方から来て残念な組あわせ
残念の目へ足袋が無い帯が無い
姑なら残念ながら話を氣に病みて
其れ切りになつた話を氣に病みて
残念と思わぬかとも父は言ひ
残念なことは女に生れ来て
惡戯を父の無い子は叱られる
無理解な巡査へ口が震へて来
残念はほこりを立て座を離れ
残念のたまに風が膨むなり

席題 殘念

多同紫一同一一同一青砂耶多同貴朝紫瓢烏格狹功將
聞水杉杉杉杉砂耶聞曉山陽水山莊樓間哉路吉耶
選



不朽洞から

路 郎 生

▼本年は柳壇にとつても我が社
とにても多事であつた。来る
べき昭和六年の柳壇に對して私
達は一層の努力を拂はねばなら
ない。夫れにつけても讀者並に
寄稿家諸君のより以上の御後援
御鞭撻を御願ひする。

▼本誌は豫想外に原稿が輻輳し
たので竹馬居主人、福田山雨樓
松盛琴人の諸君の原稿は遺憾な
ら本誌へ發表することが出来な
かつた。

▼多大の賞讃と興味を以て迎へ
られて居た月評「卓を圍んで」は
本誌を以つて打切ることにして
回顧すると年月にして三ヶ年、
掲載月三十三ヶ月になつて居る
其間會場としては不朽洞、ひろ
し居、萬よし居、里十九居の四
ヶ所を煩はし出席者路郎、紋太
松郎、山雨樓、春三、蔑乃、萬
よし、素人、多聞、町二、ひろ
し、東洋鬼、琴人、革郎、亂耽
の十五名に及んで居る。そして

これが筆記の勞をまつてくれた
人々は萬よし、琴人、革郎、ひ
ろし、亂耽、町二、欣女、愚陀
杏三の九名である。中でも革郎
亂耽、琴人、愚陀、杏三の絶大
の努力を思はせられる。

「卓を圍んで」は打切つたがこの
種の研究は本誌の一大特色でも
あり、更に新趣向の下に讀者の
期待に添ひたいと思つて居る。

▼本誌は從來年二回刊行の特輯
號に限り特價を以つて居た

が来るべき新春號から普通號な
みに値下げ斷行の舉に出た。同
時に半年及一年前金の直接購讀
者に對しては本社特製の投句用
箋を贈呈する事にした。本社

の微意の在る處を諒とせられたい
▼別項で募集して居る「創作獎
勵懸賞川柳」は應募句が續々と
集りつゝある。愈々来る五日に

其第一回を締切る事になつたから
出來得る限り多數の作家から
佳吟を寄せられん事を切望する

▼十四日午前零時に岳父蘆村翁
（河盛彦三郎）が亡くなり十五日
に告別式をしたので翌十六日の
編輯へは出席出來なかつた。編
輯は「祝全町メモ」にもあるやう
に琴人君が主になつて纏めて呉

れた。蘆村翁は御承知の通り古
い川柳家の一人であるが、こゝ
數年間は句作を絶つて居た。翁
の人となりにについては三好革郎
君が執筆して呉れたが、郵送中に
紛失したので同君の好意に對し

て甚だ遺憾ではあるが掲載する
の運びに到らなかつた。川柳家
としての蘆村翁に就ては他日私
が書いて見たいと思つて居る。

翁は亡なつた渡邊霞亭の門下で
小説を書いた時代もあつた。殆
んど一生を通じて教育界の爲め

に盡した行年六十五歳
▼小出櫓重氏は目下神經痛で惱
んで居られるやうだが一日も早
く回復せられるやう祈つて居る

▼山本雨迷、増位汀柳、廣田六
浦の三君が白川の能因會を訪問
せられたやうである。新那須温

谷に迎へて秋色を愛でられた大
谷五花村、安田喜四雄、吉田汀
舟奥村葉吉の諸君から通信に接

した。白川と大阪が段々近くな
るやうな氣がする愉快な集りで

あつたことを思ふ。
▼淺井冷々子君が二十一日に來
阪されたが同伴者があるので來
社されず其夜靜岡へ向はれた

新刊紹介

▼「白河」大谷五花村著。奥州の
白河は非常に有名だが案内記が
ないのを遺憾として白河町の住
人太谷五花村氏によつて著はさ
れたものである。發行所は福島
縣白河町番士小路東北川柳會。
定價二十錢

▼「上代文化の研究」（奈良文化
第十九號）辰巳利文編輯奈良文
化學會の刊行で頗る専門的なも
のである。編輯者辰巳利文氏は
故辰巳維楓君の令兄で篤學の士
である。發行所奈良縣畝傍町一
九七竹柏會大和支部。特價一圓

父 河盛彦三郎（蘆村）葬
儀の際は御多用中御會葬
下さいましたありがとうございました
ございましたあつく御禮
申し上げます

昭和五年十一月
大阪市西成區千本通
五丁目七番地

嗣子 河盛 純子
親戚 河盛益太郎
總代 麻生幸二郎

投稿規定

近作柳樟及課
 題吟の句稿は
 葉書又は同型
 の厚紙に各題
 別紙に認め、
 住所氏名雅號
 を明記するこ
 と。
 近作柳樟は一
 部又は二部の
 いづれかを明
 記する事。
 各地會報は半
 紙判の原稿紙
 に清記のこ
 文章は二十字
 詰半紙判原稿
 紙に認めるこ
 書體はなるべ
 く楷書「川柳
 雜誌原稿」を
 封筒に朱記す
 ること。
 締切は嚴守さ
 れたし。
 投稿其他につ
 き御問合はす
 べて返信料封
 入のこ。

募集

第八卷第二號課題

十二月五日締切
 (各題十句以内)

雨 橋本 緑 雨 選
 鼠 酒 井 駒 人 選
 病 長 崎 柳 秀 共 選
 長 谷 川 一 徹 共 選

第八卷第三號課題

一月五日締切
 (各題十句以内)

硯 大 島 壽 明 選
 福 田 山 雨 樓 選
 中 澤 濁 水 共 選
 藥 湯 揚 井 二 南 共 選

每號募集

近作柳樟(一部)十句以内
 麻 生 路 郎 選
 近作柳樟(二部)十五句以内
 安 井 ひ ろ し 選
 ◇近作柳樟の一部と二部へ同一人で
 投稿することはお断りします。

各地柳壇(會報)
 文章(評論研究感想吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に關する件、投句、贈禮
 廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務
 所宛に願ひます。

價定

普通通號 一部 金參拾錢
 新春特輯號 一部 金五拾錢
 八月特輯號 一部 金四拾錢
 牛箇年前金(特輯號共) 壹圓八拾錢
 壹箇年前金(特輯號共) 參圓六拾錢

料告廣

本誌への廣告に就き
 ましては本社へ直接
 御一報下さいませ
 ば御相談に應じます

▼御送金は郵替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確
 實であります▼請代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙
 に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金
 郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便
 (一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には
 何月號よりぞ御指が願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して
 御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和五年十一月廿五日印刷
 昭和五年十二月一日發行
 第七卷第十二號
 (毎月一回一發行)

編輯兼發行印刷人 大阪市内西成區千本通五丁目七番地 麻生 幸二 郎

發行所 大阪市内西成區千本通五丁目七番地 柳 幸二 郎

大阪市内住吉區杭全町六〇三番地 電話天下茶屋二五七九番

事務所 川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番
 電話天王寺一一六七番

書店振賣
 (大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他 市内 各書店)
 (東京仲見世) 玉森堂(神戶) 米田、後藤、寶文館(函館)
 石塚(京都) 三宅(松山) 弘文舎

清 酒

白 鶴 禮 讀

白鶴をチントンシャンと提げて来る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁こはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父こなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

内容概目

川柳
漫畫
累卵の遊び

日月は輝く

大衆と共に

著者のサイン御希望の方はその旨附記して御注文ありたし

川柳漫畫 累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美装・函入 定價一圓（送料拾錢）

麻生路郎著

川柳漫談

價壹圓五拾錢
送料 拾八錢

西原柳雨著

川柳江戸歌舞伎

價參圓五拾錢
送料 拾八錢

岡田三面子著

寛政と柳樽の改版
改革

價貳圓五拾錢
送料 拾八錢

同

川柳江戸名物

價貳圓五拾錢
送料 拾貳錢

同

隨筆 虚心觀

價貳圓參拾錢
送料 拾八錢

同

川柳吉原志

價四圓八拾錢
送料 拾八錢

今井卯木著

俳風 柳多留拾遺

價貳圓
送料 拾八錢

同

川柳風俗志 上卷

價參圓八拾錢
送料 拾八錢

川上三太郎編

新川柳壹萬句集

價壹圓五拾錢
送料 拾錢

武笠山椒著

俳風柳樽通釋

各送料拾八錢

同

川柳滑稽句集

價九拾錢
送料 八錢

谷脇素文編

川柳 いのちの洗濯

價貳圓八拾錢
送料 拾二錢

近藤館シ坊編

新川柳類壹萬句

價壹圓五拾錢
送料 拾錢

柳書取次

御注文は前金的事

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和五年十一月廿五日印刷本 昭和五年十二月一日發行

川柳雜誌

（第八十三號）

定價金三拾錢

大阪文藝社

大阪西區成
千本通五七

電話 下天 茶屋 二五七九
番 九三〇 番 二九三